

平成27年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」

# 報 告 書

平成28年3月

公益社団法人日本写真家協会



## 1. はじめに

日本写真保存センターの設立構想から10年が経った。当初は戦後間もなくの廃墟から復興に向かって人々が力を合わせて、一步一步生活基盤を築いてきた。日本人みんなが努力して平和的な民主国家を目指してよく働いた。食糧や住居不足であったにもかかわらず、老いも若きも目を輝かせて復興と平和を願ってひたすら走り続けた。

そうした時代を生きた先輩写真家たちが遺したものに、敗戦の混乱した世情のなかで、力強く生きる人々や暮らしを捉えた写真が数多く遺族の元に残されていた。この歴史を記録した貴重な写真原板群(フィルム、乾板等)を収集して、後世に残すことが必要であると考えた。

まず、先輩写真家たちの遺族を捜し連絡を取り、写真原板が残されているかどうかの初期調査から始めた。1945年から1970年代に撮影された歴史的出来事や日本人の暮らしや習俗を記録した写真原板の状況を尋ねた。遺族からの返事で、遺されている写真原板があることも確認できたが、なかには既に処分されたものもあった。それらを調べに何うと遺族の手で、父の遺品として整理されているものもあれば、写真原板を書棚や紙箱に塊として束ねられたフィルムが、無造作に押し入れや、部屋の片隅に積み上げられているものもあった。撮影からすでに数十年の歳月を経ていたため、経年劣化に加え高温多湿の住環境のため、フィルム支持体の加水分解による劣化が起こっているものも見つかった。そうしたフィルムは収蔵できないため除き、約6万本(約100万コマ以上)の原板を整理し収蔵している。

利活用するためには、写真原板をスキャニングして保存する必要がある。写されている内容や日時、場所などのデータを可能な限り詳細に記録しデータベース化している。詳細なデータは保存センターの管理用として作成し、閲覧用はこのデータベースから画像情報を中心とした簡易化したものを、ネット上で閲覧、検索ができるように進めている。

いずれにせよ写真原板の収集作業は大変である。増大する原板の収集量と整理作業をする熟練した調査員不足、それに中性紙の包材費用がかさみ苦しんでいる。一昨年からJPSの賛助会社をお願いして保存センターの支援組織を立ち上げ、年会費を頂戴して不足分を補って実施しているが資金難で四苦八苦しているのが現状である。

これらは皆様方のご支援ご協力があっはじめて、二度と撮れない貴重な写真原板の収集とアーカイブの構築が少しずつ実現している。これを軌道にのせることができるか、これからの勝負どころである。

田沼 武能(公益社団法人 日本写真家協会業務執行理事、日本写真保存センター副代表)

## 目 次

|                                |    |
|--------------------------------|----|
| 1. はじめに                        | 3  |
| 2. 本調査の概要                      | 6  |
| 2.1. 調査研究テーマ                   | 6  |
| 2.2. 調査研究の趣旨                   | 6  |
| 2.3. 調査研究の内容                   | 6  |
| 3. 調査研究の実施計画                   | 7  |
| 3.1. 業務題目                      | 7  |
| 3.2. 実施期間                      | 7  |
| 3.3. 当該年度における業務実施計画            | 7  |
| 4. 業務実施体制                      | 10 |
| 4.1. 課題項目別実施期間                 | 10 |
| 4.2. 調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿 | 11 |
| 5. 本年度収集・調査した写真原板について          | 12 |
| 5.1. 「原爆写真」という方途               | 12 |
| 5.2. 本年度収集した写真原板               | 14 |
| 5.3. 本年度受入れ写真家と受入れ時の写真原板の状態    | 17 |
| 5.4. 平成26年度以前に収集した写真原板         | 25 |
| 6. 写真原板劣化実験                    | 29 |
| 6.1. 来歴の異なるフィルムの酢酸ガスの放散量実験     | 29 |
| 6.2. 劣化加速度フィルムの作製              | 31 |
| 6.3. まとめ                       | 3  |

|                                  |       |
|----------------------------------|-------|
| 7. 写真原板データベース                    | 33    |
| 7.1. 写真原板データベースの運用で留意すべき多少の課題    | 33    |
| 7.2. 本年度作業概要                     | 34    |
| 7.3. データベース詳細                    | 37    |
| 7.4. 平成27年度「閲覧用データベース公開実証実験」のまとめ | 43    |
| 8. 情報発信                          | 49    |
| 8.1. 研究集会、講演、展示                  | 49    |
| 8.2. トピック                        | 56    |
| 9. 支援組織                          | 60    |
| 9.1. 支援組織の必要性                    | 60    |
| 9.2. 保存活動の重要性の理解と協力              | 60    |
| 9.3. 事業運営に必要な要員・資金の確保            | 61    |
| 9.4. 支援組織会員の募集要項                 | 61    |
| 10. まとめ                          | 63    |
| 図 版                              | 65～68 |

## 2. 本調査の概要

### 2.1. 調査研究テーマ

わが国の文化的、歴史的に貴重な写真原板(フィルムおよび乾板等)が散逸、遺棄されつつある現状を防ぐため、写真原板の収集保存を図り、学術、情報、教育機関並びに博物館・美術館、郷土資料館等での利活用をするためのアーカイブ施設の構築を行うための基本的な調査研究を行う。

### 2.2. 調査研究の趣旨

わが国の近現代を撮影した写真原板を収集し、劣化の予防と長期保存のための処置を施して収蔵し、利活用を図る。

### 2.3. 調査研究の内容

#### (1) 具体的内容及び方法

現状を把握し、保存・活用にあたっての課題を明らかにするため、以下について調査研究を行い、今後の方策を検討する。

#### (2) 調査研究計画

##### ① 諮問会議の実施

調査研究を行うにあたり、写真史、保存技術、権利処理、利活用、アーカイブに関わる専門家による諮問会議を実施し、当施設の基本理念、具体的な活動方針を図るための会議を開催する。

なお、データベースの構築および保存技術については、専門家による分科会を設け作業を進める。

##### ② 調査委員会の設置と写真原板の収集保存

調査委員会を立ち上げ、関係者の元を訪ねて写真原板の収集を図る。

第1期として、1945年から1970年代および第2期の戦前の写真原板、1970年以降に撮影された写真フィルムを、物故写真家の遺族並びに所蔵機関、関係者から収集し、画像データの取得を図る。写真原板から撮影情報の分析を行いデータベースの構築を図る。

##### ③ 写真原板の収集基準と保存方法

激動した時代を記録した原板を収集する。データベース化の必要から印刷物等に公表されたものを優先し、次いで第2期、戦前の写真原板、1970年以降の現代をとらえた写真原板へと範囲を広げて行く。

長期保存をするために、写真原板(フィルムおよび乾板等)収集時のネガホルダーを中性紙のホルダーに入れ替え、低温低湿(温度10℃、湿度40%RH)を恒常的に保てる収蔵施設(東京国立近代美術館相模原分館のフィルムセンター保存庫)へ納める。

収集した写真原板は、クリーニングしたのち、中性紙の包材に入れ替え、スキャニングを行い、デジタル化したデータでもってデータベースの構築を行う。

##### ④ 写真原板の利活用

データベースの利活用に関しての権利処理や公開、非公開などの判断、公開方法の実証実験を行い、インターネットでの閲覧、利活用に関する調査研究を行う。

松本 徳彦(公益社団法人 日本写真家協会副会長)

### 3. 調査研究の実施計画

#### 3.1. 業務題目

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」(「写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」)

#### 3.2. 実施期間

平成27年4月契約締結日から平成28年3月31日まで

#### 3.3. 当該年度における業務実施計画

##### (1) 写真原板の収集調査

写真原板の収集は、原則として1945年から1970年代および、1945年以前の時代を克明に記録した歴史的文化的に貴重な原板(フィルム、乾板等)を対象とする。それらを撮影した写真家の多くはすでに物故されていて、原板は遺族の元で保管されている。しかし、保存環境が必ずしも良好でなかったために、フィルムの経年劣化と湿気や高温による加水分解が起こり、一部の原板が使用に耐えない状態となっているものが多数あった。さらに、遺族の高齢化に伴い、原板を維持管理することが困難な状況が起こっている。

また、原板を納めたネガホルダーの多くが酸性紙のため、紙質がぼろぼろと崩れやすくなっている。ホルダーの表紙に書きこまれていた撮影時の記録も読み取れなくなっている。そのため撮影内容を把握することが大変難しくなっている。そのためデータベース化する作業が困難を極めている。

##### (2) 原則寄贈から寄託へと範囲を拡大、権利処理の検討

これまでは原板の収集を物故者に限定していたものを、現役の写真家にまで収集範囲を拡大することで、写真家本人から情報を直接聞き取ることができるようにし、撮影日時や内容を把握することが可能となり、情報の信頼度を高めることができた。

しかし、写真家が現役であり、いまなおその原板を使つてのプリントや印刷物等への需要があるため、原板を当センターへ積極的に預けるところまではきていない。収集した写真原板やその内容を、日本写真家協会の会報(年3回)で紹介するようになって、高齢の写真家や遺族などから寄贈や寄託の申し出が増えてきた。

権利処理に関しては、寄託扱いのものに関しての、著作権だけでなく利活用に係る権利処理にも配慮する必要性が生まれ、寄託契約のひな型作りを急いでいる。

##### (3) 写真原板のデジタル化とモノクロプリント制作

原板をホルダー毎にスキャニングして、画像情報を取得している。また収集時の酸性紙のホルダーから原板を中性紙のホルダーに入れ替え、長期保存を図っている。

デジタル化は画像情報の整理や閲覧、検索には便利だが、デジタルデータそのものを安定的かつ長期的に保存する方法が確立されているとは言い難いところから、貴重な原板に関しては、バライタ印画紙によるモノクロプリントを一部で行っている。

##### (4) アーカイブ構築に向けてのデータベース

平成26年度に整備できた「SAI-CHI」の管理用データベースは、利活用に向けての閲覧用データベースの構築へと整備を急ぎつつ、実証実験を繰り返し利便性、安定性の完成度を高めている。

その検証結果、「SAI-CHI」が写真原板データベースとして、機能、利便性に優れていることが認められた。

これは既に京都府立総合資料館で、写真画像の検索に活用されており、汎用性、メンテナンス等で確実性、安定性、経済性が保たれていることが知られている。

「SAI-CHI」の運用後は、各地の美術館、博物館、図書館、公文書館、郷土資料館などで収蔵されている写真原板との情報の互換性、共有化についても調査研究を進めることにしている。

近い将来、データベース化された画像情報を、インターネットを介して閲覧できるシステムにまで発展させ、情報の共有化を図ることを提案したい。このシステムが機能すれば、わが国に散在している貴重な画像データを集約、利活用化すれば、画像に関する巨大なアーカイブが誕生することになる。

#### (5) データの利活用

画像データの利活用については、原則としてデジタル化した画像データを利用することになっている。データベースに登録された画像は、誰もがWeb上で閲覧・検索ができるようにしたい。

登録された研究者の場合は、より詳細なデータや画像情報を検索するために、当センター内で管理用データベースの閲覧ができる仕組みも検討している。

#### (6) 写真原板の保存と劣化に関する情報の広報と啓発

写真原板の劣化については、毎年当センターが催すセミナー（公益社団法人日本印刷技術協会）で、「写真原板の劣化とその対策」、「保存と写真情報のアーカイブ化」、「保存技術に関するセミナー」などを催し、写真フィルムの長期保存を考える多くの写真家や愛好家、各地の公文書館、博物館、美術館、図書館、郷土資料館、企業博物館などの関係者に向けて、保存の重要性を啓発している。

さらに、当センターでは写真原板の保存の必要性をアピールするための写真展の開催を適宜行い、収集した貴重なフィルムからプリントした写真展の開催並びに、各地の博物館・美術館等で催される展示活動にも、収集作品の貸し出し、提供等にも積極的に関与していくことにしている。

そうした要望にこたえるために、写真原板を長期に、適切に保存する方法を解説した小冊子の発行を検討している。

#### (7) 日本写真保存センターの作業環境

一連の作業は、千代田区一番町のJCIIビル内で行っている。写真原板の保存の必要性が高まるごとに、収集量が増えてくるため、作業室の拡張やPCなどの機器の拡充を必要としている。現在調査員5名、アルバイト1名で対応しているが、写真原板のデータの収集・調査、フィルムのクリーニング、スキヤニングには熟練度のある人材が必要で、現在は写真専門大学の大学院卒業生が務めているが、人件費に限られているため、長期に人材を確保することが難しい状況にある。

また、包材を中性紙のものに交換する経費も多大で、やむなく日本写真家協会の賛助会社による支援に頼らなければならないという苦勞をしている。

#### (8) 日本写真保存センターの活動の紹介と写真原板収蔵の意義

当センターでは写真原板の収集保存の必要性をテーマとした「被爆から70年 知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」写真展を、平成27年8月4～30日まで千代田区一番町のJCIIフォトギャラリーで催した。NHKをはじめとするテレビでの放映、新聞各紙での掲載、米軍の機関紙Stars and Stripesが世界に発信するなど、被爆直後の写真に大きな関心があった。

当センターが収蔵している写真原板の内容については、日本写真家協会の会報(年3回)やホームページで逐次紹介している。

(9) 未収集となっている写真原板の収集継続

昨年度に引き続き、木村伊兵衛、濱谷浩、林忠彦、田村茂、菊池俊吉、岡村崔、川島浩、緑川洋一、中村由信、野上透などの追加収集、さらに現役の写真家約10名の寄託希望者の実態調査も行う。

松本 徳彦(公益社団法人 日本写真家協会副会長)

## 4. 業務実施体制

## 4.1. 課題項目別実施期間

|     | 事項             | 内容   | 備考     |
|-----|----------------|--|--------|
| 4月  | 調査委員会(調査活動)    | (笹本恒子)   | 東京     |
|     | 調査委員会(収集活動)    | (久保靖夫、和木光二郎)   | 神奈川、東京 |
|     | 支援組織会議①        | 平成26年度経過、平成27年度年間計画報告                                |        |
| 5月  | 諮問調査委員会議①      | 平成27年度年間計画   |        |
|     | データベース会議①      | 管理データベース修正、閲覧データベース構築の年間計画(凸版)                       |        |
|     | 調査委員会(収集活動)    | (増田彰久)   | 東京     |
|     | 調査委員会(調査活動)    | (梅村豊、佐藤元洋)   | 東京     |
| 6月  | 調査委員会(収集活動)    | (永田一脩、岡村崔)   | 東京、静岡  |
|     | 調査委員会(調査活動)    | (岩波書店)   | 東京     |
|     | 写真原板の収蔵作業①     | 相模原フィルムセンター保存庫へ収蔵                                    | 神奈川    |
|     | 包材研究(調査活動)     | 文化財保存修復学会ポスター発表(山口孝子委員)                              | 京都     |
| 7月  | 調査委員会(調査活動)    | (大竹省二)   | 東京     |
|     | データベース会議②      | 管理データベースデータ移行、閲覧データベース構築打合せ(凸版)                      |        |
| 8月  | 写真展・展示①        | 「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」展、講演会                        | 東京     |
|     | 調査委員会(調査・広報活動) | 「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」展見学会、講演会(アート・ドキュメンテーション学会共催) | 東京     |
|     | データベース会議③      | 管理データベースデータ移行、閲覧データベース構築打合せ(凸版)                      |        |
|     | 調査委員会(収集活動)    | (渡辺義雄)   | 東京     |
| 9月  | データベース会議④      | 管理データベースデータ移行、公開データベース構築打合せ(凸版)                      |        |
| 10月 | 諮問調査委員会議②      | 経過報告、今後の計画   |        |
|     | 調査委員会(調査活動)    | (大竹省二)   | 東京     |
|     | 支援組織会議②        | 経過・収支中間報告、今後の計画                                      |        |
| 11月 | 調査委員会(収集活動)    | (佐伯義勝、渡辺義雄、吉岡専造)                                     | 東京     |
|     | 調査委員会(収集活動)    | (緑川洋一、山本陽子、和木光二郎)                                    | 岡山、三重  |
|     | 調査委員会(調査活動)    | (田村茂)  | 東京     |
|     | 写真原板の収蔵作業②     | 相模原フィルムセンター保存庫へ収蔵                                    | 神奈川    |
|     | データベース調査①      | データベース連携実験打合せ(日本写真著作権協会)                             |        |
| 12月 | 調査委員会(収集活動)    | (緑川洋一、渋谷大郎)  | 岡山、埼玉  |
|     | データベース会議⑤      | 管理データベースデータ移行、公開データベースデータ移行打合せ(凸版)                   |        |
| 1月  | 諮問調査委員会議③      | 平成27年度報告・新年度計画                                       |        |
|     | 調査委員会(調査活動)    | (増田彰久)   | 東京     |
|     | 調査委員会(収集活動)    | (木村伊兵衛)  | 東京     |
|     | データベース会議⑥      | 管理データベースデータ移行、閲覧データベースデータ移行(凸版)                      |        |
| 2月  | 調査委員会(収集活動)    | (稲越功一、菅井日人)  | 東京     |
|     | 調査委員会(調査・広報活動) | page2016オープンセミナー「写真原板のデジタルアーカイブの現在」                  | 東京     |
|     | 写真展・展示②        | CP+2016「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」展<br>「日本写真保存センター紹介展示」 | 神奈川    |
|     | データベース調査②      | 閲覧データベース実証実験   |        |
| 3月  | 報告書作成          | 平成27年度事業報告   |        |

## 4.2. 調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿

### 事業実施体制

公益社団法人日本写真家協会

#### 統括部門

- 理事 田沼 武能(一般社団法人日本写真著作権協会会長)
- 理事 熊切 圭介(公益社団法人日本写真家協会会長)
- 理事 松本 徳彦(公益社団法人日本写真家協会副会長)
- 理事 瀬尾 太一(一般社団法人日本写真著作権協会常務理事)

### 諮問・調査委員会

#### 諮問・調査部門

- 委員 北村 行夫(虎ノ門総合法律事務所・弁護士)
- 委員 金子 隆一(写真史家)
- 委員 田良島 哲(東京国立博物館博物館情報課課長)
- 委員 高橋 則英(日本大学芸術学部教授写真学科主任)
- 委員 吉田 成(東京工芸大学芸術学部教授写真学科主任・同大学院芸術学研究科長)
- 委員 白山 眞理(一般財団法人日本カメラ財団・調査研究部長)
- 委員 多田 亜生(編集者)
- 委員 大亀 哲郎(日本ユニ著作権センター企画室主任研究員)
- 委員 山口 孝子(東京都写真美術館保存科学専門員)
- 補助員 和田 直樹(公益社団法人日本写真家協会理事)
- 補助員 小池 汪(公益社団法人日本写真家協会会員)
- 補助員 高井 潔(公益社団法人日本写真家協会会員)
- 補助員 内堀 タケン(公益社団法人日本写真家協会会員)
- 補助員 辻 徹(公益社団法人日本写真家協会会員)

### 調査作業部門

- 主任 中川 裕美(学芸員 日本大学大学院芸術学研究科映像芸術専攻博士前期課程修了)
- 副主任 笛木 諭(東京工芸大学大学院芸術学研究科メディアアート専攻博士前期課程修了)
- 調査員 打林 俊(日本大学大学院芸術学研究科芸術専攻博士後期課程修了)※5月30日退職
- 調査員 大関 直樹(東京工芸大学大学院芸術学研究科メディアアート専攻博士前期課程修了)
- 調査員 河原 健一郎(日本大学大学院芸術学研究科映像芸術専攻博士前期課程修了)
- 調査員 渡邊 英雄(写真研究者)

事務局長 池田 雄二

## 5. 本年度収集・調査した写真原板について

### 5.1. 「原爆写真」という方途

#### 5.1.1. 原子爆弾の投下が生み出したもの

1945(昭和20)年8月6日午前8時15分、広島市上空でアメリカ空軍B29爆撃機から投下されたウラニウム型原子爆弾がさく裂。爆風と火災で92%の建物が一瞬のうちに破壊消失し、約13平方キロメートルが「原子野」になった。そして3日後の8月9日午前11時2分、長崎市上空でプルトニウム型原子爆弾がさく裂。約6.7平方キロメートルが「原子野」になった。この二つの原子爆弾によってどれだけの人が傷つき、どれだけの人が亡くなったかを正確に答えられる者はいない。推定によれば、同年12月末までに広島では約14万人(誤差±1万人)、長崎では約7万人(誤差±1万人)であったとされている。

小さな太陽ともいべき原子爆弾の爆発は、強い熱線と放射線を放ち、強烈な爆風を起こし、この地上のすべてのものを崩壊させ焼き払った。さらに眼には見えない放射線は生命の核に異常を生じさせたのであった。この被爆直後の惨状については、かろうじて生き残った人々「語り部」たちによってさまざまに語り継がれている。

「広島城がなくなっている！ 起き上がって校庭から逃げる途中、私はどえらいことが起こったと思った。校庭にはまだ多くの生徒たちが倒れたままだった。私のゲートルは片方がなくなっており、服は焼けてちぎれていた。また後頭部から背中にかけて、火傷をしたのか、ヒリヒリと熱く痛かった。両手・両足は、完全に皮膚がたれ下がっていて、まさに幽霊のような格好だった。」(高橋昭博「ヒロシマの語り部」より)

「家という家は無残にも押しつぶされ、すでに火の手が上がっているものもある。倒壊した家の中からは呻き声、助けを求める声が聞こえる。道路には傷を負ったもの、ボロ雑巾のようにめくれた皮膚をゾロゾロと引きずって歩く者、真っ赤に腫れ上がった者、死にかかった者たちが必死に歩こうとする。その群れはすでに人間の姿を失った化物の姿にも等しく、死の行列である。」(福田須磨子「生きる」より)

この原子爆弾がなぜ投下されたかという問いに対して、連合軍の中心であったアメリカが第二次世界大戦を速やかに終結させるための最良の判断として行ったという謂いがある一方、それに対して当時から疑義があったことも近年の調査研究の中で明らかにされている。さらに重要なことは、この原子爆弾を製造しそれを実際に投下したことの倫理的な問題は、未だ不問に付されているといっても過言ではない。言い方をかえれば、この原子爆弾が投下されたことによって生み出された状況は、きわめてデリケートでポリティカルな問題をはらんであるということは重要であり、見失ってはならない条件の一つである。

このように、原子爆弾という未曾有の武器を実際に使用することによって生み出された状況は、物理的なデータとして、身の毛がよだつような物語として、さらには政治的な条件として、様々な位相がある。原子爆弾が生み出した現実を、カメラという機械の眼がとらえた「写真」とは、いったいどのような意味をもつのであろうか？

#### 5.1.2. 被爆写真の位相

被爆から70年となる節目の年に日本写真保存センターは、日本カメラ財団との共催で、写真展「知っていますか… ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」(平成27年8月4日～30日、JCIIフォトサロン、東京)を開催した。この写真展は、広島、長崎に原子爆弾が投下された直後から1945年10月末までに写真家11人によって撮影された写真60点で構成したものである。ここで展示された写真は、基本的には撮影当時のオリジナル・ネガ原板(フィルム・乾板)からプリントされたものである(この展示の詳細については、別項目の報告を参照されたい)。

ここで展示された被爆直後に写真を撮影した人間の立場やその目的はさまざまである。松重美人のように中国新聞の写真部員でありながら軍司令部報道班員の腕章を持ち、しかし軍から直接に命令を受けて撮影したのではなく個人的な使命感をもってかろうじてシャッターを切った存在があり、深田敏夫のように学徒動員で陸軍兵器廠に働いていて、たまたまカメラを持っており、原子爆弾のきこ雲であることを知らずに、しかし記録しておかなければいけないという素朴な使命感でシャッターを切った者、山端庸介のように軍報道部の直属として「出来るだけ対敵宣伝に役立つ、悲惨な状況を撮影するように命令され」て被爆の翌日の未明に長崎に入り撮影した者もいる。

このようにある者はプロフェッショナルな写真家であり、ある者は偶然にカメラを持っていたアマチュア写真家であり、と立場はさまざまではあるが、ここに共通するのは、原子爆弾が生み出した現実を、地上にあつて被爆者とともに放射線を浴びながらカメラを向けてシャッターを切ったということであろう。そして被爆直後に撮影した者たちは、それが原子爆弾というこれまでの武器とは根本的に異なる位相にある武器がもたらした現実であることを知らずに、ただこれまで見聞きしたものとは全く違う現実を前にして、ある種の判断停止状態の中でシャッターを切ったと言ってよい。そのような中で撮影された「写真」は、通常の写真を撮るという行為とは異なる位相を写真の歴史にもたらしたと言っては過言であろうか(これは東日本大震災で被災者たちがさまざまな立場で写真を撮影したことに通底している)。

それに対して同じ1945年であっても、終戦後において広島・長崎へと向かった写真家たちは、被爆直後の判断停止状態の中で写真を撮影した者とは異なる位相でシャッターを切っていると言ってよい。日本学術研究会議原子爆弾災害調査特別委員会の委嘱で、日本映画社のスタッフや学術研究者らとともに広島・長崎へと向かった林重男、菊池俊吉や戦前に日本写真公社のスタッフ・カメラマンとして内閣情報部が発行する『写真週報』の仕事をしていた、広島市出身の佐々木雄一郎らは、爆風で破壊された原子野の光景も焼けただれた身体で横たわる被爆者たちの姿も、それが「原子爆弾」という未曾有の武器によってもたらされた現実であることを知って撮影をしている。それゆえ、目の前の惨状がどのような意味を持っているかを測ろうとするものになっていると言ってよい。このようにこの展覧会で展示された写真群は、二つの位相をもっている。

「原子爆弾」ということを不十分ではあるが知っていることにもとづく写真と、何が何だかわからずに撮影された写真の間には、微妙ではあるが決定的な違いがあるとしても、これらの写真は撮影直後に発表されたわけではない。1951(昭和26)年のサンフランシスコ講和条約締結までは、原子爆弾による惨状を撮影した写真は、GHQの報道管制によって一般の人々の眼にふれることはなかった。それが初めて公にされたのは『アサヒグラフ—原爆被害初公開号』(1952年8月6日発行)においてであった。ここには被爆直後の写真とその後の写真とを区別することなく構成されている。そして原子爆弾による惨状を記録した広島・長崎の写真は、今日に連続する「ヒロシマ・ナガサキ」の写真になったと言ってよい。

この「広島・長崎」から「ヒロシマ・ナガサキ」への変容の背景には、後に「原爆文学」と称されるような占領期に発表されてきた小説や詩、またジョン・ハーシーによる『ヒロシマ』(石川欣一・谷本清訳、1949年、法政大学出版局刊)などのルポルタージュなどの刊行、そして「ノー・モア・ヒロシマズ(広島悲劇を再び繰り返すな)」を合言葉に世界的な規模での平和運動の勃興などがある。この一連の動向の中に被爆の惨状を記録した写真が登場したのであった。

### 5.1.3. 被爆写真から原爆写真へ

上述してきたように、原子爆弾による惨状の記録した写真が戦後社会の中に登場したとき、あらたな位相が切り開かれたと言ってよい。つまり被爆の惨状を記録したという以上の意味を与えられたのである。そのとき日本の都市名である漢字表記の「広島・長崎」がカタカナで「ヒロシマ・ナガサキ」(アルファベットでの表記も含む)と書

き換えられ、「原爆」は被災地日本の問題から世界の問題へと展開していったのである。

このことは戦後になって様々な写真家たちが被爆者の惨状を主題とした写真表現を確立してゆくことへとつながっている。土門拳の写真集『ヒロシマ』(1958年刊)や東松照明による写真集『<11時02分>NAGASAKI』(1966年刊)に代表される写真は、原子爆弾がもたらした現実が戦後という歴史の中でどのようにあるのか、つまり1945年の被爆のときから始まる時間を、いかに終わることのない現在進行形のものとして持ち得るのかを問いかけるものであったと言えよう。

写真展「知っていますか… ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」もまた被爆から始まる時間を、70年たった現在のなかになかに現在進行形として持ち得るのかを問いかけるものにほかならない。さらに日本写真保存センターは、被爆直後に撮影されたオリジナル・ネガ原板を体系的に保存・活用することを提案している。これは「原爆文学」という謂い方にならば「原爆写真」という枠組みを世界写真史のなかにつくること提案することになるのではないだろうか。

しかし「原爆写真」という謂いは、決して被爆直後の写真を特殊化、カテゴリー化しようということではない。少なからず放射線を浴びたに違いないこのオリジナル・ネガ原板の保存は、単なるイメージの問題を超えて、被爆資料のひとつとして、つまり一つの「もの」を未来へと届ける行為でもあるはずだ。原板の保存は、終わることのない現在進行形の時間を刻ませることに他ならない。

そして展示された写真は、オリジナル・ネガ原板が被爆後の70年間の中でどのように劣化しているのかを示す間接的な証拠である。放射線を浴びた原板が存在していることを広く社会に示すのが、展示された写真の在り所である。そしてこの原板群は、ユネスコの世界記憶遺産として登録すべき対象であるという機運が高まっているが、それこそが「原爆写真」を人類共通の記憶として未来永劫語り継いでゆくための方途であるといえよう。

金子 隆一(写真史家)

## 5.2. 本年度収集した写真原板

### 原子爆弾による被爆の惨劇をみる

2015年はヒロシマ・ナガサキに原子爆弾が投下され、甚大な被災と膨大な死傷者をだした原爆被害から70年の節目であった。日本写真保存センターでは2014年9月に、長崎原爆を撮影した山端庸介氏のご子息祥吾さんから、父の撮影したオリジナルネガの保存を当センターに寄託された。これを契機に、この歴史的に貴重な写真原板を末永く保存することを決め、同時にこの原板の存在を世に問う方法として、写真展の開催を決めた。

原爆被災状況を捉えた写真は、原子爆弾による世界初の被爆地広島なくして語れないところから、当時を撮影した写真原板を探し出し、それぞれのオリジナルネガからの精緻なプリントを制作して展示・保存することを提唱した。関係者の協力を得て写真展は8月4日から30日まで、東京のJCIIフォトサロンで展示した。

写真展にはこれまで写真とは無縁と思われる方々が多数来場され、被爆時の凄惨な状況を冷徹な目でもって記録したヒロシマの松重美人、ナガサキの山端らの写真を食い入るように見つめ、写真による記録の重要性と、誰もが理解できる写真の訴求力、迫力に感動していた。

日本写真保存センターが最も大事にしたい、世に問いたい写真原板の現状を伝えるに相応しいプレゼンテーションであったといえる。また、これらの写真原板は世界に遺された原爆被害の唯一つの記録で、貴重な文化遺産あるいは記憶遺産として保存することが如何に大事であるかの証左であった。

この展示を見られた方々から写真の保存方法についてであったり、自分のもっている写真原板の寄贈方法を聞きたいといった問い合わせが相次いだことは、写真原板の保存の意義や有効活用に関心があることを裏付けるものであった。

## 写真原板の収集、調査研究進む

本年度の写真原板の収集で特筆できるものに、写真界で初の文化功労者となった渡辺義雄氏(2000年没、93歳)の撮影原板約3万点を遺族から寄贈を受けたことである。この中には1953年、これまで神域として撮影が許可されなかった「伊勢神宮」の全社殿を撮影した写真原板がある。渡辺義雄氏は以後20年毎に行われる式年遷宮を通算3回にわたって撮影する。また、法隆寺を始めとする「奈良、大和古寺」のほぼ全域を撮影し、その精緻な建築写真は他の追従を許さない完璧なものである。このほか「出雲大社」、「旧帝国ホテル」、「迎賓館」、「新宮殿」など壮大な建築群の撮影原板は2度と撮りえない貴重な大記録でもある。

保存センター設立のとば口となった木村伊兵衛の膨大な写真原板の一部、「前進座」の舞台写真と演者の写真原板が寄託されたことである。これを機に次々と戦後日本を代表する写真家の原板を追加収集することに期待したい。

時を刻む風土、時代を映す人々の営みなどを捉えたドキュメントでは、菊池俊吉が1945年に撮影した広島原爆による被爆者の医療現場の原板がある。1950年代の「砂川闘争」や「内灘闘争」を撮った佐伯義勝(後に料理写真家として大成)の原板も戦後史を語る上で貴重だ。アサヒグラフで活動した吉岡専造の「吉田茂」や「愛児の誕生から1年一人間零歳」を撮った写真などヒューマンなイメージが光る。これら人間社会を撮られた写真が、時を超えて利活用される度合いが強いことも実証されている。

## 写真原板のデジタル化

収集した写真原板はフィルムの劣化の有無を調べ、フィルムに付着した埃を取り払うクリーニングを行い、古い酸性紙を使ったネガホルダーを中性紙のものに交換する作業を行う。その上で収集整理番号を付け台帳に記録している。しかし膨大な数の原板のすべてをこの方法で処理することはできない。最大の問題は包材経費と調査作業員の確保が難しいことが処理を遅らせている。さらに、収集した写真原板の中には、経年劣化したものがあつた。それらは相模原のフィルムセンターの収蔵庫には収蔵できないため、劣化の程度に応じて分別し、別の場所に借りた低温の倉庫で保存している。

写真原板を整理し利活用を可能にするには、デジタル化は欠かせない。35ミリフィルムの場合は、ホルダーからフィルムを取り出し、フラットベッドの大型スキャナー上に並べ、コンタクトシートを制作する。この時点でデジタルデータ(800dpi)が生成され、その後の作業に生かされる。このシートに記録された画像から、撮影された内容の確認を行い、ホルダーに記されたメモや記載内容を台帳に転記することで、初めてデジタル化の一步が始まる。しかしこの時点でのデジタル化はあくまでも画像内容の確認のためで、データを元にリプリントするには、画像容量が足りなくせいぜいキャビネプリント程度のクオリティーしか得られない。高精細なプリントをする場合には、改めてその必要とするプリントサイズに合わせた容量でのスキャニングを行っている。

フィルムのデジタル化は写真原板の長期保存のためには必要なことであり、利活用の効率化には欠かせない作業である。

松本 徳彦(公益社団法人 日本写真家協会副会長)

## 写真原板資料受入概要

本年度は14名、約61,523本の写真原板資料を受け入れた。写真原板資料の概要は表1の通り。初期調査未の本数は受け入れた原板資料が調査途中のため概数である。各原板の詳細は5.3で紹介する。

表1 平成27年度写真原板資料受入概要

| 撮影者名   | 受入日                      | 受入数         |             | 内容   |
|--------|--------------------------|-------------|-------------|--|
|        |                          | 初期調査未<br>本数 | 初期調査済<br>本数 |  |
| 久保靖夫   | 4月10日                    | —           | 25          | 東京オリンピック<br>当時の町   |
| 和木光二郎  | 4月14日<br>11月17日          | 101         | —           | 女優・俳優<br>伝統工芸・和菓子<br>特撮映画制作風景                                      |
| 増田彰久   | 5月12日                    | —           | 84          | 旧朝香宮邸  |
| 永田一脩   | 6月24日                    | —           | 521         | 山、釣り   |
| 岡村崔    | 6月30日                    | —           | 20          | 絵画、彫刻、建築<br>(ルネサンス～バロックの西洋美術)                                      |
| 渡辺義雄   | 8月14日<br>8月28日<br>10月14日 | 30,000      | 582         | 「伊勢」「宮殿」「六大寺」<br>「イタリア」「モスクワ」他                                     |
| 佐伯義勝   | 10月5日                    | 404         | —           | 雑誌、料理写真  |
| 山本陽子   | 11月20日                   | 100         | —           | 芸者   |
| 緑川洋一   | 11月25日<br>12月25日         | —           | 285         | 瀬戸内海   |
| 渋谷大郎   | 12月25日                   | 124         | —           | ポートレート、風景  |
| 木村伊兵衛  | 1月19日                    | 203         | —           | 「前進座」  |
| 吉岡専造   | 2月9日                     | 441         | —           | 『人間零歳』関係   |
| 稲越功一   | 2月9日                     | 3,245       | —           | 「男の肖像」「アジア視線」「カナダ」<br>「ハワイ」「奥の細道」<br>「シルクロード」「Beyond the Holizon」他 |
| 旧写真協会※ | 2月15日                    | 25,083      | —           | 「写真週報」   |
| 菅井日人   | 2月25日                    | 305         | —           | 「ザビエルへの道」「イタリアの教会」<br>「スペインの大聖堂」「ルルド」                              |
| 合計14名  |                          | 60,006      | 1,517       |  |

※ 旧写真協会は新規受入れではなく、受付番号を再交付したための増加。詳細は5.3.1.を参照

### 相模原フィルム保存庫入庫内容

本年度の相模原フィルム保存庫への入庫作業は6月25日、11月12日の2回行い、計7,210本の写真原板を収めた。写真原板の入庫内容を表2に記す。

表2 平成27年度写真原板入庫内容

| 撮影者名       | 入庫原板数 | 入庫方法 |
|------------|-------|------|
| 吉岡専造       | 837   | A    |
| 朝倉隆        | 1,356 | A,B  |
| 和木光二郎      | 558   | B    |
| 旧写真協会      | 1,363 | A    |
| 辻本満丸       | 47    | A    |
| 佐伯義勝       | 5     | A    |
| プリストル, ホレス | 54    | A    |
| 恒成一訓       | 476   | A,B  |
| 菊池俊吉       | 14    | A    |
| 児島昭雄       | 2,139 | A,B  |
| 増田彰久       | 84    | A    |
| 菊原馥        | 148   | B    |
| 永田一脩       | 129   | B    |
| 合計 13 名    | 7,210 | —    |

表2の入庫方法については以下の通り。

A = 中性紙製の蛇腹式ホルダーやタトウに収め、ストレージボックスに入れ替え。

B = グラシン紙製のレフィルに収め、中性紙製の段ボールとプラスチックでつくられたリングファイルに入れ替え。

C = 受け入れ時のフィルムホルダーをドライクリーニングし、ストレージボックスに入れ替え。

D = 受け入れ時に長期保存に適した包材だったため、入れ換えなし。

### 年度別各作業処理数

日本写真保存センターはこれまで54名、約205,308本の写真原板を受け入れた。そのうち相模原フィルム保存庫へ収めた写真原板は55,429本。未処理の写真原板は149,879本。年度別の各作業処理数は表3の通り。

表3 年度別各作業処理数

| 年度       | 写真原板受入数 | 相模原入庫数 | 未処理数    |
|----------|---------|--------|---------|
| 平成 21 年度 | 28,712  | —      | 28,712  |
| 平成 22 年度 | 25,626  | —      | 54,338  |
| 平成 23 年度 | 42,906  | —      | 97,244  |
| 平成 24 年度 | 2,767   | 8,901  | 91,110  |
| 平成 25 年度 | 3,516   | 15,139 | 79,487  |
| 平成 26 年度 | 40,258  | 24,179 | 95,566  |
| 平成 27 年度 | 61,523  | 7,210  | 149,879 |
| 合計       | 205,308 | 55,429 | 149,879 |

平成27年度の相模原入庫数が少ないのは、写真原板データベースの構築を行い、データ入力作業が中断せざるを得ない期間が発生したため。

笛木 論(調査員)

### 5.3. 本年度受入れ写真家と受け入れ時の写真原板の状態

久保靖夫 1936(昭和11)年 -

神奈川県生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。東京都庁広報室に写真担当として勤務。1969年『アサヒカメラ』新人賞。都庁退職後、1999年、東京都写真美術館勤務を経てフリー写真家として活動。東京オリンピック、東京副都心開発、パンダの来日、安保闘争など、東京で起きた出来事、東京の建築物、風俗、街の変貌を克明に記録した。主な写真集に『東京の祭り』(小池龍三：共著 木耳社 1972年)、『Family Album - 家族の記録』(光村印刷 1996年)、主な写真展に「東京メモリアル - 戦後昭和時代の東京」(JCHフォトサロン 2005年)他。

#### 写真原板の特徴

2015年4月10日に、135判・中判・4×5判モノクロ、カラーポジフィルム、およびプリント計25点を受入れた。撮影対象は1960年代、高度経済成長によって大きく変貌を遂げる東京の風景や航空写真が中心である。原板は、撮影年代や撮影場所が子細に記されたメモと共に封入されており、社会的、歴史的な資料としての価値が高い貴重な資料である。



図1 原板・プリントが納められたファイル



図2 原板画像  
1938(昭和13)年12月21日 中央区本町一京橋間が開通

### 増田彰久 1939(昭和14)年 -

東京生まれ。日本大学芸術学部写真学科卒業。1999年大成建設写真退職後、増田彰久写真事務所を設立。建築写真家。明治、大正、昭和戦前の西洋館を中心に日本の近代建築を撮影。海外でもヨーロッパ、アメリカ、アジアの都市と建築を撮影。写真集に、『写真集 明治の西洋館』(毎日新聞社 1971年)、『フランク・ロイド・ライトの世界』(技法堂出版 1976年)、『日本の建築』全10巻(三省堂 1979年)、『アール・デコの館 旧朝香宮邸』(藤森照信：共著 三省堂 1984年)、『写真集成・日本の近代化遺産』(日本図書センター 2000年)、『日本の洋館』(講談社 2003年)他。写真展に、『『現存せず』消えた西洋館』(ニコンサロン 2011年)他。第33回日本写真協会賞年度賞、第9回伊奈信男賞他受賞多数。

### 写真原板の特徴

2015年5月12日に『アール・デコの館 旧朝香宮邸』に使用されたと推測される4×5判カラーポジフィルム83点を受入れた。原板の状態はおおむね良好であるが、一部に褪色が見られる。

### 永田一脩<sup>いっしゅう</sup> 1903(明治36)年 - 1988(昭和63)年

福岡県生まれ。「かずなが」とも読む。1923年、東京美術学校(現：東京芸術大学)西洋画科に入学し、藤島武二に師事。在学中は前衛演劇運動に参加。卒業後は「前衛芸術家連盟」や「未来派美術協会」にも参加し、絵画作品のほか雑誌の表紙デザインなどグラフィックの仕事も行った。またプロレタリア美術運動に深く関わり、1930年代に著書『プロレタリア芸術論』を刊行。1930年代後半からは『フォトタイムス』誌を中心に、海外の写真動向や写真評論を精力的に執筆し、1939年には瀧口修造らと「前衛写真協会」を結成。シュルレアリスムに傾倒し、独特の世界を展開した。1941年、東京日日新聞社(現：毎日新聞社)に入社し、戦後は『カメラ毎日』創刊より同誌編集に携わった。1956年、バーモント・ニューホールの著作『写真の歴史』を共訳した。1958年、毎日新聞社を退社。ほかに、山岳写真や釣りの分野でも活躍。写真と文章で構成した著書『山釣り、海釣り』もある。魚拓の専門家としても名高く、その活動領域は極めて多岐にわたっている。

### 写真原板の特徴

2015年6月24日に中判、135判、カラーポジ、モノクロネガおよび手作りアルバム522点を受入れた。撮影対象は、釣り・山・人物・風俗・海外など多岐に渡るが、戦前に取り組んだ前衛的な作風を感じさせる物は見当たらない。一部のモノクロネガに銀鏡や汚れがあり、カラーポジには褪色、カーリング、一部には溶解がみとめられた。



図3 原板受入れ状況



図4 著書『海釣り』表紙に使用された原板

<sup>たかし</sup>  
岡村 崔 1927(昭和2)年 - 2014(平成26)年

東京生まれ。芝浦工業専門学校(現：芝浦工業大学)を経て、日本大学理工学部建築学科で建築家、デザイン教育者の川喜田煉七郎に学ぶ。1958年からヨーロッパでの撮影をはじめ1965年からイタリア、ローマに転居。古代ガラス工芸、写本、ポッティチェリ、ラファエロからジョルジョ・デ・キリコまで幅広く西洋絵画・美術工芸品の撮影を行う。バチカン市国システーナ礼拝堂内の壁画《天地創造》(ミケランジェロ作)修復作業を撮影し、世界的評価を得る。1995年に帰国。『大系世界の美術』(学研マーケティング 1971~75年)、『世界彫刻美術全集』(小学館 1974~77年)、『ミケランジェロ・ヴァティカン壁画 - 天地創造』(講談社 1981年)、『The Art of Florence』(Abbeville 1988年)、『La Cappella Sistina』(Rizzoli 1989年)他、海外を含め、美術図書への掲載多数。写真展に1980年、「ミケランジェロのヴァティカン壁画」、1986年、「ヴァティカン・ラファエロの壁画」他。日本写真協会賞、ダンテ・アリギエリ芸術国際賞、川村賞を受賞。

### 写真原板の特徴

2015年6月30日に、岡村崔氏が画集や美術研究資料のためにルネサンスの絵画を撮影したカラーポジフィルム19点を受け入れた。写真原板には、色再現の基準となるカラーチャートが写し込まれている物もある。写真原板には作品番号が付与され、題名・作者名、所蔵、材質・素材・技法、および所在地・撮影フィルムサイズ・撮影部分・撮影年月日などについて、岡村崔氏ご遺族の岡村眞弓氏によって詳細なメタデータが入れられていた。絵画の題名や制作年代、技法は、判断に専門的な知識を必要とするメタデータである。5×7判という大判フィルムを使い絵画のディテールまで精密に記録されていること、カラーチャートを写し込み被写体の絵画の色をより忠実に(測定器的に正確に)再現できる「真正性」の高い画像となっていること、内容についての正確なメタデータがあること、また、被写体は実物を日本で見る機会が少ない教会所蔵の絵画が多いことから、本受け入れ写真原板は、西洋美術史研究にとって極めて貴重な資料であるといえる。



図5 原板と被写体について  
ご遺族が作成したデータベース



図6 カラーチャートと共に撮影された  
原板

### 緑川<sup>よういち</sup>洋一 1915(大正4)年 - 2001(平成13)年

本名、横山<sup>さとし</sup>知。岡山県生まれ。日本大学歯科医学部を卒業後、1937年に横山歯科医院を開業。1939年緑川洋一の名前で写真雑誌の月例懸賞に応募を始める。石津良介の紹介で「中国写真集団」に参加。1945年岡山連帯区司令部の報道班を結成、班員となり歯科医師の傍ら被災状況などを撮影。岡山市内で街頭写真展「銃後の生活」を開催。1947年、植田正治と共に「銀龍社」に参加。1955年二科会写真部の会員となり審査を担当。二科会写真部会員。主な写真集に、『瀬戸内海』(美術出版社 1962年)、『京都』(東京新聞社 1970年)、『瀬戸内旅情』(集英社 1979年)、『皇居・自然と造形』(集英社 1981年)、『竹久夢二・望郷の山河』(ぎょうせい 1990年)他。写真展に、「秋山庄太郎・林忠彦・緑川洋一・植田正二4人展」(松島ギャラリー 1955年)など多数。主な受賞 1962年 日本写真批評家協会作家賞受賞、1963年 岡山県文化賞受賞、日本写真協会年度賞受賞、1973年 内閣総理大臣賞、1990年 勲四等瑞宝章受章。

### 写真原板の特徴

2015年11月25日に第一回、12月25日第二回受入れを行った。撮影内容はいずれも、1950～60年代の瀬戸内海の島々で撮影された風景写真である。受入れ原板の総計は135判、中判、モノクロネガフィルムを中心に285点。うち6点はガラス乾板である。原板の状態はおおむね良好である。撮影場所・テーマごとにベタ焼きアルバムが作られ、撮影データ、被写体データが詳細に記されていた。



図7 被写体について詳細に記述されたベタ焼き帳



図8 鳴門

山本陽子 1955(昭和30)年 -

青山学院大学文学部史学科考古学専攻卒業。現代写真研究所修了。1999年に文化庁芸術家在外研修員としてイタリア、ミラノに留学し、写真芸術史と芸術理論を学ぶ。神楽坂を拠点に東京五花街(新橋、赤坂、神楽坂、葎町、浅草)、伝統芸能、薩摩武士道の世界を撮影。2007年、TVドラマ「拝啓、父上様」エンドロール写真担当。写真集に、『Geisha : Beyond the Painted Smile』(George Braziller 2004年)他。フランス国立図書館、ハーバード大学フォッグアート美術館、ピーボディ・エセックス博物館他に作品収蔵。現在契約手続き中。

渋谷<sup>たいろう</sup>大郎 1923(大正12)年 - 2010(平成22)年

新潟県に生まれる。主婦と生活社を経て、ファッション、料理写真等で活躍。1968(昭和43)年、日本写真家協会、入会。

写真原板の特徴

2016年2月9日に受入れを行った。受入れ原板は、1950～60年代撮影と推測される日本各地の風景写真及び著名人ポートレートで、135判、中判、モノクロネガ、カラーポジ計124点である。主婦と生活社写真部のネガケースが散見されることから、雑誌や書籍に使用された原板である可能性が高い。一部ネガから酢酸臭、カーリングがみとめられる。



図9 受入れ状況



図10 有名人物ポートレート

木村伊兵衛 1901(明治34)年 - 1974(昭和49)年

東京に生まれる。1924年、東京日暮里に営業写真館を開設。花王石鹼広告部を経て、1932年、月刊写真雑誌『光画』発刊。1934年、中央工房設立。1941年、東方社設立。対外宣伝紙『FRONT』写真責任者。1947年、『週刊サンニユース』創刊、写真部主任となる。1950年、日本写真家協会、初代会長に就任。主な写真集に『木村伊兵衛外遊写真集』(朝日新聞社 1955年)、『木村伊兵衛作品 - 前進座舞台写真集』(研光社 1966年)、『木村伊兵衛の眼』(朝日新聞社 1970年)、『木村伊兵衛名作写真全集』(世界文化社 1979年)、『定本 木村伊兵衛』(朝日新聞社 2002年)他、多数。主な受賞 1955年 菊池寛賞、1956年 芸術選奨文部大臣賞、1968年 紫綬褒章、1974年 従五位勲四等旭日小授章。

### 写真原板の特徴

2016年1月19日に写真集『木村伊兵衛作品－前進座舞台写真集』に使用された135判モノクロネガフィルム・カラーポジフィルムを中心とした前進座の公演風景・舞台稽古写真計203点の受入れを行った。撮影年代は1940～70年代と推測され、前進座写真集発刊以後も当テーマについて継続的に撮影されていたようである。前述の通り、1940～70年代と、長期間にわたって同一テーマについて撮影されているにも関わらず、モノクロネガについてはすべて撮影時代順に並べられ附番されるなど、非常に良く整理されている。舞台公演のような撮影テーマでは、撮影日時や撮影場所の特定が困難なケースが多い為、このような年代ごとの整理や附番、詳細な被写体内容の書き込みは、非常に重要なメタデータとなる。

多くのネガがグラシン紙製ネガケースに収納されており、一部からは酢酸臭やカーリングが確認された。特に撮影年代の古い、硝酸セルロース(ナイトレート)ベースフィルムで撮影された原板の一部に、癒着や硬化などの著しい劣化がみとめられた。これは箱内の収納密度が極めて高く、発生した酸性ガスに長期間曝され、劣化が促進されたためと推測される。



図11 年代順に附番された原板

### 菅井日人<sup>にっと</sup> 1944(昭和19)年 - 2015(平成27)年

東京に生まれる。日本大学芸術学部映画学科卒業後、朝日TVニュース制作部、日経映画社を経て1970年フリー写真家となる。ヨーロッパ、アメリカ、東南アジアなどを訪問し、主に土地の人々や建築、聖地をテーマに撮影を行う。主な写真集に、『聖フランシスコはいま』(あかし書房 1981年)、『祈りの大聖堂シャルトル』(講談社 1986年)、『キリストの道』(グラフィック社 1992年)、『天国の窓』(サンパウロ 2012年)。日本写真家協会会員、日本写真芸術学会会員、カトリック・ジャーナリストクラブ会員

### 写真原板の特徴

当センター受入れ原板は、135判カラーポジフィルムを中心に合計305点であった。撮影対象は、1990年代のイタリア、スペインの教会を中心とした風景および、フランシスコザビエルに所縁のある日本の教会の風景である。撮影時期が新しく、原板の状態は良好である。テーマ・撮影地・使用写真集ごとに整理されている。

## 受入継続中の作家

作家のプロフィールは前年度までの報告書にて記載済みのため、受入れ継続中の作家は、写真原板の特徴のみを記す。

### 和木光二郎<sup>こうじろう</sup>

昨年度に引き続き、2015年4月14日に第四回、11月17日に第五回の受入れを行った。撮影内容は、それぞれ和菓子(モノクロネガフィルム・カラーポジフィルム 計66点)、1960年代に撮影された円谷プロダクションの特撮撮影風景・NHK『ひょっこりひょうたん島』の撮影風景など(モノクロネガフィルム、カラーポジフィルム 計35点)である。

いずれも状態は良好であり、作家自身の手によりテーマごとに整理されている。和菓子や伝統工芸品など、専門性の高い被写体については、調査員による被写体の特定が非常に難しい場合があるため、ホルダーの書き込みが重要である。ご本人による分類整理がなされていることは、非常に喜ばしい。



図12 受入れ状況



図13 被写体ごとに整理された原板および目録

### 佐伯義勝<sup>よしかつ</sup>

一昨年度に引き続き、2015年10月5日に第二回受入を行った。1960～70年代に撮影された雑誌取材写真と推測される135判、中判モノクロネガフィルム342点、佐伯氏の主たる撮影テーマである料理写真の4×5判カラーポジフィルム58点、プリント等その他資料3点の計404点を受入れた。

135判モノクロネガには酢酸臭がみとめられたが、4×5判カラーポジフィルムの状態は極めて良好である。



図14 受入れ状況



図15 ポジフィルム(料理)

## 渡辺義雄

一昨年度に引き続き、2015年8月14日より計三回に分けて受入れを行った。

今年度は、ほぼ生涯作品の全数となる総数約3万点の写真原板(ダンボール19箱、小型筆筒5竿)とプリント111箱(四つ切～全紙)を受入れた。撮影対象は、伊勢神宮・京都・出雲・奈良六大寺・大和古寺・宮殿・迎賓館・帝国ホテル等である。写真原板は、ガラス乾板、5×7判、4×5判等の大判フォーマットが多く占め、建築物をきっちりとした描写で捉えている。写真原板の状況は、概ね良好であるがカラーに関しては褪色が進んでおり、酢酸臭がするものも混じっている。著名な建築写真家であったが故か、同じ被写体、同じ構図の写真原板が多数あり(オリジナル、控え、デュープ、フィルムサイズ違い等)その判別をすることはほぼ困難と思われる。また出版社から写真原板を回収出来ていないのか、写真集に掲載されている原板が見あたられないものもある。3万点余りの大量の原板を適切に処理するためには、従来の受入ステップを見直し、短時間で効率的な調査方法の検討が必要である。

## 吉岡専造

昨年度に引き続き、2016年2月9日に第四回受入を行った。写真集『人間零歳』を撮影した135判モノクロネガフィルム、プリントを中心に計437点を受入れた。フィルムの状態は良好であり、撮影日付ごとに非常に細かく整理されている。昨年度受入れ分と合わせて、『人間零歳』撮影ネガの大半を受け入れたものと考えられる。



図16 受入れ状況



図17 撮影日順に整理された原板

## 稲越功一

一昨年度に引き続き2016年2月9日に第四回受入を行った。写真集『男の肖像』(集英社 1981年)『女の肖像—現代日本の女流100人』(文藝春秋 1984年)に使用されたと推測されるフィルムと、中国・ヨーロッパなど世界各地で撮られたフィルムを中心に、135判、中判フィルム(カラーポジ、モノクロネガフィルム)、4×5判(カラーポジフィルム)計3,245点を受入れた。撮影時期が比較的新しい事もあり、いずれも状態は良好であるが、一部に酢酸臭や包材との癒着がみとめられる。また多くのフィルムがビニール製の包材に入れられていることから、劣化の加速度的な進行が懸念される。シリーズごとに非常に良くまとまってお引き伸ばし指示などが記された包材も多数見受けられるため、写真集等に使用された原板の特定も比較的容易であると予想される。今後の利活用のためにも、早急な処置が必要である。



図18 テーマ別に分類された原板



図19 ポートレート作品

中川 裕美(調査員)  
河原 健一郎(調査員)  
渡邊 英雄(調査員)

参考文献：2000年、東京都写真美術館、『日本写真家事典』、京都、淡交社  
2005年、東京都写真美術館(監)・日外アソシエーツ(編)、『現代写真人名事典』、東京、日外アソシエーツ  
2005年、東京都写真美術館(監)・日外アソシエーツ(編)、『日本の写真家』、東京、日外アソシエーツ  
日本写真著作権協会ウェブサイト <http://www.jpca.gr.jp/id/search.php>(2016年3月20日確認)

#### 5.4. 平成26年度以前に収集した写真原板

昨年度(平成26年度)以前に受け入れた写真原板について、本年度も継続して調査を行い、以下の発見があった。

##### 5.4.1. 旧写真協会(写真週報)の写真原板

###### 5.4.1.1. 調査の現状

受入れ原板のうち、ほぼ全ての135判フィルム及び全ての乾板について調査・原板および包材画像のデジタル化が完了した。調査済本数は、135判フィルム2,208点、乾板12点、計2,220点である。

###### 5.4.1.2. 写真週報に使用されたコマの特定

使用されたコマの特定には、東京都写真美術館作成資料『国立公文書館蔵「写真週報」ネガフィルムベタ焼きと原本との照合結果』及び、国立公文書館Webサイト『「写真週報」に見る昭和の世相 参考資料室データベース』の写真週報紙面を、スキャン画像データおよび包材記載撮影内容と照らし合わせるにより実施し、計531点の使用コマを特定した。コマ特定の作業を進める中で、包材表記内容と、週報に記載された被写体表記内容とがほぼズレなく一致していることが判明した。今後は包材表記内容データを積極的に活用し、より効率的な使用コマの特定を実施する。



図20 『写真週報』33号表紙使用コマ  
撮影:内閣情報部



図21 『写真週報』33号表紙

#### 5.4.1.3. 受付番号附番の方針変更

大名刺判(65×90mm)、小名刺判(57×83mm)のシートフィルム及び中判フィルムについては、受付番号を再交付した。

135判フィルムでは、撮影内容が記載されたホルダーに原板を収納するスリーブが付随していたため、ホルダー1本ごとに受付番号を附番する事ですべての記載データとコンタクト画像データを一致させることが可能である。ところがシートフィルム・中判フィルムでは、封筒の中に更に複数の内袋があり、原板が1コマずつ封入された状態で収められていた。

従来方式のように外袋の封筒にのみ受付番号を付与する形では、内袋の記載データ及び画像と、原板スキャン画像とを一致させる手段がなくなってしまう。内袋には原板1枚ごとの附番のほか、撮影対象、撮影年月日、トリミング指示など、今後の調査・利活用にあたり極めて重要な情報が記されている物もある。先述の通り包材の記述は、使用コマの特定に極めて有用な情報源であり、これらを正しく記録するためには内袋と原板とに一意的な附番がなされていることが必要不可欠である。そのため、封筒ごとに付与されていた受付番号を内袋1枚ごとに改めて受付番号を付与した。受付番号を付与しなおした後の旧写真協会の総受入れ数は27,303本となった。



図22 複数枚の原板が、一枚ずつ小袋に入れられた状態で封入されている

### 変更前



図23 変更前の附番方法

### 変更後



図24 変更後の附番方法

#### 5.4.2. 渡辺義雄の写真原板 — 『モスクワの一日』

『モスクワの一日』は、渡辺義雄がアジア連帯文化使節団に写真家代表として参加した際に、インド、ロシア、モンゴル、中国、ベトナムで撮影され、1957年2月に写真展「アジア諸国の姿」として発表されたものの内、ロシアで撮影された一部を同年5月に写真集の形でまとめたものである。

平成25年度受入れ原板を調査したところ、ヨーロッパ、アジア各地を被写体とした原板が見つかり、その一部に『モスクワの一日』に使用された原板が含まれることが判明した。写真集に掲載された58点の写真のうち、46点分のコマを特定した。特定は、渡辺氏より寄贈された写真集とスキャン済み原板画像とを照らし合わせることにより行った。



図25 『モスクワの一日』使用コマ



図26 『モスクワの一日』より「トレチャコフ美術館」

河原 健一郎(調査員)

#### 5.4.3. 朝倉隆の写真原板 — 撮影対象を「束」で整理

##### 5.4.3.1. はじめに

生涯かけて撮影した原板の量は写真家によって当然のことながら異なる。

それらの原板は写真家が撮影の対象とした塊に分類することができるし、対象ごとの塊を確認すれば全体を把握することができる。

2015年1月から9月まで朝倉隆が撮影した約2,000点の原板ホルダーすべてを開いた。

この「何が写っているか」の確認作業で得られた結果を報告する。

原板は朝倉の指示に従い束ねられており、この「束」は把握作業で大きな力になった。

朝倉は岩波写真文庫『村と森林』(1958年)の撮影に参加したがそのほかに何を撮影したか。

確認作業が効率よく進められたのは「束」のおかげである。

##### 5.4.3.2. 依頼によると思われる対象を写した原板

山村関係では1950年代の各地を歩き『村と森林』と同じ視線で追い、肥桶を天秤棒で担ぐ農婦、長い長い樋で水を水車まで導く光景などを撮っていた。素裸の海女や塩田など漁村の風景、捕鯨船の記録は捕鯨銃発射の瞬間から鯨の解体までがあった。現在はほとんど失われてしまった光景を撮影したそれらがどのように発表されたかは確認できなかった。

企業関係ではガラス吹きから電球が製品として完成するまでを、粉ミルク工場の取材では牧場の乳牛までを撮影していた。

音楽がネット配信の現代では遺物的存在であるレコードの生産現場も残っていた。

和服で機内サービスする航空会社職員。

空撮の原板も散見され、これらは場所の特定作業ができれば有用な記録となる。

ジェトロ(日本貿易振興機構)が扱う日本製品を多く撮影していて、「ブツ撮り」ではあるがそれらはその時代の日本製品のレベルを感じさせた。

#### 5.4.3.3. 依頼とは思われない対象を写した原板

山形県、農家の壁に空いた穴と飛び込んできた50センチほどの砲弾を前に板の間で当惑したように座る農民夫婦。原板から当時、全国に米軍基地が存在していたと想像できる。

日比谷公園で示威行動する人びとが写っているコマは「血のメーデー事件」が起こった皇居前広場のコマへ続いていた。この原板からはあの事件の経緯が推理できる。

鉄道線路のコマから始まるホルダーで朝倉は「松川事件」を記録。1950年代は国鉄(現在のJR)で下山事件、三鷹事件と現在に至るまで未解決の事件が発生した。写真は1コマでも膨大な情報量を持つからこれらは後世の研究で解析に資する可能性を期待できる。

9か月間、実際にホルダーを開けて印象に残ったものを列記したがこれらが大きな塊の中にあっただけではない。印象に残る原板は35ミリに最も多く、続いて6×6であった。

朝倉のホルダーに「何時」「何処で」「何を」が記載されてはいたが完全ではなかった。

しかしサイズと「束」、朝倉によるメモが作業を進める上で大いに役立った。残された写真原板はメモなどの文字情報とともに扱い方においても配慮が必要、と感じた調査であった。



図27 『村と森林』より 1958年

小池 汪(公益社団法人 日本写真家協会会員)

## 6. 写真原板劣化実験

収集および保存対象である写真作品の原板には、フィルム、乾板、湿板等が挙げられる。収集写真原板の多くは、TAC（トリアセテートセルロース）が支持体であるフィルムが占めるため、この支持体の劣化が調査の過程で大きな問題となった。この劣化現象は、化学反応と高温多湿の環境が誘因となる支持体の加水分解である。さらに劣化したフィルムから発生している酢酸ガスが蓄積すると、自触媒作用によって劣化が促進されてしまう。そこで、既に劣化が始まっている写真フィルムの長期保存や、劣化要因の排除を目的とした最適な環境設定や収蔵前の処理などを検討している。TACフィルムの劣化挙動に着目して、過年度では、劣化した写真フィルムの保存温度と放散する酢酸ガス量との相関性、保存箱内における吸着材を用いた低減方法、フィルムの収納方法について報告した。

今年度は、収集前の写真原板の保管環境は様々であることから試料を増やし、平成25年度に確立した劣化したフィルムからの酢酸ガス放散量測定法を用いて、(1) A-Dストリップ(以下ADSとする)の値に対する酢酸ガスの放散量の振れ幅を調査した。また、保存箱の使用期間の算出、周りの環境への影響調査、劣化したフィルムの酢酸ガスの除去方法や修理方法のモデル実験のために、(2) 恒温恒湿器を用い、加速度試験による劣化フィルム作製レシピを検討したので、その内容を報告する。

### 6.1. 来歴の異なるフィルムの酢酸ガスの放散量実験

実験には来歴の異なるフィルム試料を用いた。これらの試料のADSによる劣化レベルを表1に示す。フィルムから放散される酢酸ガスだけではなく、保存箱に吸着している酢酸ガスからも放散があり、ADSはその合算に反応していると考えられる。よって、試料とするADSレベルは、包材を入れ替えた後の値とした。ADSレベル1(以下ADS1とする)を3組、ADS2を3組、ADS3を1組の写真ネガフィルムを準備した。ADS3については、包材を入れ替えることによって包材に吸着していた、あるいは包材内にこもっていた酢酸ガスが放出し、ADSレベルが下がったため、レベル3を保持した試料は1種類しか用意できなかった。

表1 実験に用いた試料

| 試料<br>No. | ADS レベル |   |            |           | 備考<br>使用原板   |
|-----------|---------|---|------------|-----------|--------------|
|           | 包材入替え   |   | マウント 27 コマ |           |              |
|           | 前       | 後 | 上部         | 下部        |              |
| A         | 2       | 1 | 0.5 (0.3)  | 0 (0.2)   | コダック TRI X   |
| B         | 3       | 1 | 0.5 (0.3)  | 0 (0.2)   | コダック TRI X   |
| C         | 1       | 1 | 0.5 (0.5)  | 0.5 (0.4) | コダック TRI X   |
| D         | 2       | 2 | 0.5 (0.6)  | 0.5 (0.5) | コダック TRI X   |
| E         | 3       | 2 | 0.5 (0.6)  | 0.5 (0.5) | フジ NEOPAN SS |
| F         | 3       | 2 | 1.0 (0.9)  | 1.0 (0.8) | フジ NEOPAN SS |
| G         | 3       | 3 | 0.5 (0.6)  | 0.5 (0.6) | コダック TRI X   |

試料はスライドマウントに収め、27コマをガラスチャンバーに入れた。試料A~Gで、それぞれ同じ試験装置を組み、20°C・40%RHに設定した恒温恒湿器にセットした。30分間の通気後、1L/minで30分間の通気を行い捕集管にサンプリングした後、酢酸およびギ酸の発生量をイオンクロマトグラフによって分析、定量し、放散速度を求めた。

放散速度( $\mu\text{g}/\text{枚}\cdot\text{h}$ )とは、放散量( $\mu\text{g}/\text{m}^3$ ) $\times$ 吸引速度( $\text{m}^3/\text{h}$ )/ネガ枚数である。10°C、次に5°Cに温度設定を変更し、同様にイオンクロマト用捕集管にサンプリング後、分析を行った。10°Cと5°Cは放出量が少ないため、60分間通気した。併せて検知管法による測定を比較し、簡便な保存環境の管理法も検討した。

イオンクロマト用のサンプリングは、7試料、各試料における温度3段階の計21点となる。酢酸ガスの発生量か

ら求めた放散速度と通気温度との関係を図1に示す。ADS2と3では、酢酸放散量の結果が逆転した。同じADSレベルでの放散速度では、例えば20℃において、ADS1は0.25～1.32、ADS2は1.23～3.13 $\mu\text{g}/\text{枚}\cdot\text{h}$ のばらつきが認められた。劣化度と放散速度の相関を明確化するためには、劣化度の違いによる放散速度データの蓄積が必要であろう。

図2には、平成25年度の結果と今回の結果を全てプロットした。また、酢酸とギ酸の発生量および放散速度の詳細は表2にまとめた。同一ADSレベルであっても、放散量が異なる結果となった。特にADS3の放散速度は、2.5～58 $\mu\text{g}/\text{枚}\cdot\text{h}$ と振幅が大きい。

測定結果のばらつきの原因としては、ADS1.5以降は急激に劣化速度が速まるために、フィルム試料に対するADSレベルの厳密な判定が難しいことが挙げられる。ADS1.5は、「自触媒作用点」として、IPIの「アセテートフィルムの保管ガイド」でフィルム寿命予想の基点となっている。また、実験は9月、12月に実施したため、試料が保存環境(季節)の変化に影響を受けた可能性も考えられる。試料の選択の際、一定の期間枯らしをするなど、フィルム試料に付着している酢酸ガスを取り除き、正確なADSレベルを測るために試料の標準化を行う必要性があるだろう。

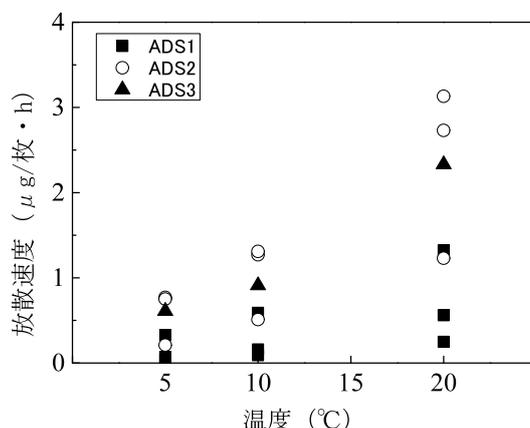


図1 温度と酢酸ガスの放散速度の関係

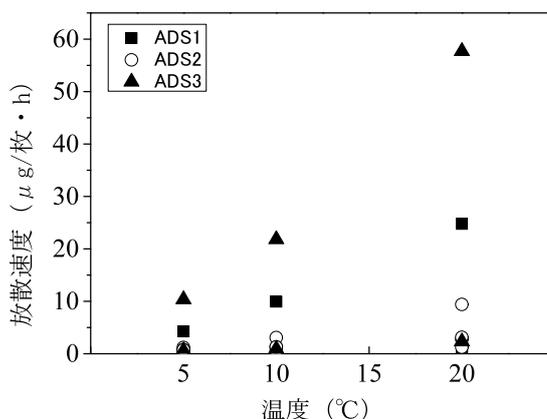


図2 温度と酢酸ガスの放散速度の関係  
昨年度の結果もプロット

表2 ADSレベルと酢酸とギ酸の発生量および放散速度の関係

| 試料 No. | ADSレベル | 温度 (°C) | 発生量 (イオンクロマト) ( $\mu\text{g}/\text{m}^3$ ) |         | 放散速度 ( $\mu\text{g}/\text{枚}\cdot\text{h}$ ) |
|--------|--------|---------|--|---------|--|
|        |        |         | 酢酸   | ギ酸 (参考) |  |
| A-1    | 1      | 5       | 31   | < 4     | 0.07   |
| B-1    | 1      | 5       | 18   | < 4     | 0.04   |
| C-1    | 1      | 5       | 150  | < 4     | 0.33   |
| D-1    | 2      | 5       | 348  | < 4     | 0.77   |
| E-1    | 2      | 5       | 94   | < 4     | 0.21   |
| F-1    | 2      | 5       | 337  | < 4     | 0.75   |
| G-1    | 3      | 5       | 274  | < 4     | 0.61   |
| A-2    | 1      | 10      | 74   | < 4     | 0.16   |
| B-2    | 1      | 10      | 40   | < 4     | 0.09   |
| C-2    | 1      | 10      | 266  | < 4     | 0.59   |
| D-2    | 2      | 10      | 571  | < 4     | 1.27   |
| E-2    | 2      | 10      | 229  | < 4     | 0.51   |
| F-2    | 2      | 10      | 589  | < 4     | 1.31   |
| G-2    | 3      | 10      | 407  | < 4     | 0.91   |
| A-3    | 1      | 20      | 250  | 5       | 0.56   |
| B-3    | 1      | 20      | 112  | < 4     | 0.25   |
| C-3    | 1      | 20      | 596  | < 4     | 1.32   |
| D-3    | 2      | 20      | 1,227                                      | 4       | 2.73   |
| E-3    | 2      | 20      | 553  | < 4     | 1.23   |
| F-3    | 2      | 20      | 1,410                                      | < 4     | 3.13   |
| G-3    | 3      | 20      | 1,047                                      | < 4     | 2.33   |
| A-1*   | 1      | 5       | 1,916                                      | 12      | 4.26   |
| B-1*   | 1      | 5       | 533  | 9       | 1.18   |
| C-1*   | 1      | 5       | 4,859                                      | 7       | 10.6   |
| A-2*   | 2      | 10      | 4,477                                      | 38      | 10.0   |
| B-2*   | 2      | 10      | 1,388                                      | 19      | 3.08   |
| C-2*   | 2      | 10      | 9,818                                      | 67      | 21.8   |
| A-3*   | 3      | 20      | 11,146                                     | 95      | 24.8   |
| B-3*   | 3      | 20      | 4,237                                      | 49      | 9.42   |
| C-3*   | 3      | 20      | 25,966                                     | 175     | 57.70  |

\*前回2013年9月の測定結果

## 6.2. 劣化加速度フィルムの作製



図3 実験装置

試料のフィルムには、Kodak Gray Cardを富士フィルム ACROS 100で撮影した後、現像液D76で20°C・7分30秒、定着F-5で10分、水洗、乾燥したものを用いた。①摺合せ三方コック、②ジョイントクリップ、③溝付セパラルカバー、④シリコン製Oリング、⑤取付金具、⑥セパラルフラスコ2000mL、⑦シャーレを用いて、密閉容器を組み立てた(図3)。試料のフィルムは3コマずつに裁断し、12本をポリエチレン製の糸に通して、セパラルフラスコ内に吊した。この際、前後のフィルムが密着しないように、フィルムとの間にテフロン筒を通した。シャーレには酢酸99.7%溶液および蒸留水を入れ、この密閉容器を60°Cの恒温器内にセットした。後日、試料フィルムを取り出し、常温下でドラフトチャンバー内に24時間吊した後、ADSで劣化レベルを測定した。再び、常温下のドラフトチャンバーに12日間吊した後、再度ADSで劣化レベルを測定した。

表3に ADS1~3 を作製した強制劣化条件をまとめた。

表3 ADSレベルと強制劣化条件

| 試料<br>No. | 酢酸 99.7%<br>(mL) | 蒸留水 (mL) | 60°C 設定<br>恒温器<br>(日) | ADS レベル |       |
|-----------|------------------|----------|-----------------------|---------|-------|
|           |                  |          |                       | 1 日後    | 12 日後 |
| a         | 2                | 20       | 12                    | 2       | 1     |
| b         | 10               | 0        | 1                     | 3       | 2     |
| c         | 10               | 20       | 6                     | 3       | 3     |

表3の強制劣化条件は、密閉容器の体積に依存するものの、人工的にADS1～3に値する劣化フィルムのレシピは得られた。

劣化レベルに合わせたフィルムを人工的に作製することは、目的(A) 酢酸放出模型として、保存箱の使用期間の算出、あるいは周りの環境への影響調査、目的(B) 劣化したフィルムの酢酸ガスの除去方法や修理方法の検討などへの活用が期待できる。今回のレシピは、目的(A)のモデル実験用の試料のための支持体の劣化は再現できたが、高湿度の影響により、乳剤層の劣化が自然に劣化したフィルムよりも激しくなってしまった。目的(B)のための試料としては、湿度を下げた条件による作製を検討しなければならないだろう。しかし湿度を下げると、現在の実験装置では乳剤層への吸湿分が補給できず、恒湿条件が失われてしまう。乳剤層の自然劣化の再現性に関しては、今後の課題としたい。

### 6.3. まとめ

- ・ 放散量の振れ幅
  - 試料が保存環境(季節)の影響を受けた可能性
  - 自触媒作用点がADS1.5であるため、放散量に幅がある
- ・ 試料の標準化の必要性
  - 一定期間の枯らし後にADSレベル測定
  - 枯らし温度の検討
- ・ 密閉容器の体積に依存するものの、人工的にADS1～3のレシピは完成
  - 酢酸放出模型としてモデル実験用の試料としては、使用可能
  - 乳剤層が劣化を伴わない低湿度による作製の検討

山口 孝子(東京都写真美術館 保存科学専門員)

## 7. 写真原板データベース

### 7.1. 写真原板データベースの運用で留意すべき多少の課題

過去の本研究報告書でも言及したことだが、「写真」の情報を管理するデータベースを作ろうとする場合、必要な情報が何かという点については十分に吟味しなければならない。ここ数年来の写真保存センターとシステム開発者の努力によって、現在センターで運用しているデータベースの枠組みはかなり改良が加えられてきている。これからは、実際にデータを入力してゆく際に、必ずしもデータベースの構造で整理しきれない情報を、どのように記述に反映するかが重要になってくるだろう。ここでは、二つほど課題をとりあげてみたい。

#### 7.1.1. 決めづらい名称について

データベースが公開された時に、利用者がまず検索語として思い浮かべるのは「撮影者」か「被写体の名称」であろう。撮影者は別名や号などを別とすれば現代の人物の場合、あまり問題ではなく、データの統制もたやすい。むずかしいのは個別の写真に付けられるべき名称である。最近、東京国立博物館に第二次大戦前の中国の史跡を撮影した数千枚にのぼる写真（焼付写真）の寄贈を受けた。受贈に当たって幸いだったのは、現地を踏んだ撮影者自身がていねいに整理を続け、大多数に撮影地と被写体の名称が付けられていたことである。

しかし、いつもこのようにわかりやすい形で写真が引き継がれるわけではないことは、これまでの保存センターの経験が如実に語る場所である。ネガのスリーブや撮影者のメモに手がかりが残っていればともかく、原板以外全く何も情報がない、という場合にどのような名称を付ければよいか。この点はやはり方針とガイドラインが必要ではないかと考えるところである。以前に被写体の分類について議論したことがあり、結果的にカテゴリーを作った分類はかなり困難だという結論になった。だからといって、データベースとして検索の対象になる以上、被写体を何と呼ぶかという点について、記述の方針がなくてよいというわけにはゆかないだろう。

たとえば一人の人物が写っている。「人物」では自然の風景や動物ではないということしかわからない。「男性」「女性」であれば、まず性別はわかる。「男性半身」とか「椅子に座る女性」となれば姿形が多少見えてくる。「蛇の目傘をさす和装の女性」ならば、撮影のシチュエーションや時代もおぼろげながら想像できるかもしれない。このような名称のつけ方を蓄積し、ある程度ガイドライン化してゆけば、必ずしも体系的な分類に頼らなくても、似た画像、同じような状況を絞り込んでゆくことが可能となるように思う。今後、入力されるデータが増加する中で、検討をしていただけると幸いである。

#### 7.1.2. 撮影手順の記述について

上記のように、多くの人は「写真」とは「被写体が写った像」だと考えていて、いつ、どこで、何が写されているのかという情報が求められる。社会的に関心を集めるのも直接には「写っている人やもの」であることが多い。しかし実際は「写真」とは「撮影者が、撮影機材を通して、何らかの意図のもとに被写体を選択して記録した像」で、像は一連の作業手順の結果である。写真保存センターのように「写真原板の保存」を主な仕事とする場合には、当然、撮影の手順にまつわる情報をいかに的確に記録するかという点が、重要なポイントとなる。

「写真の撮影」という行為に関連する情報を区分してみると(1)撮影者の情報(2)撮影機材の情報(3)被写体の情報くらいに大別できるだろう。一般に「写真の情報」とは上述のように(3)だと思われており、それが「芸術写真」の枠組みに入ると(1)が認識されるようになる。(2)はかなり意識しないと情報として残されない。

さらに整理すると(1)には直接シャッターを押すカメラマン自身の他に「写真の注文主」「カメラマンが所属する会社」なども含まれ、さらにこれら「撮影者」はそれぞれ「撮影の意図」を内包していることがわかる。たとえば芸術写真は自分の芸術的感興を表現するのが意図であり、舞台写真は興業主誰々の注文を受けて、舞台何々

の記録を作成する、といったことである。これは「権利の所在の確認」という至って実務的な課題のために必要であるだけでなく、写された像が持つ個性の淵源を探る上でも不可欠な情報であろう。

「撮影の意図」を実現するために(2)撮影機材が用いられる。ここで「撮影機材」と言った場合、カメラなどゼマイ意味での撮影器具類の情報の他に、フィルムなど感材の種類やコマの順番に関する情報、撮影時の絞りやシャッター速度の情報、などを含んだほうが取り扱いやすい。当然「写真原板」の物理的な形態もこの部分で記述しなければならない。デジタル画像のメタデータであるExifは、基本的にこの部分の情報収集と保持を担うものであり、銀塩写真を含めてデータベースの構築に当たってはこれに準拠したメタデータを行うのが適当である。

無論、銀塩写真の時代にあつては、撮影に関するメタデータは人手によって何らかの形で記録されなければ残らないものであり、この点、撮影機器が自動的に情報化してくれるデジタル写真とは異なった手間がかかることは言うまでもない。これらもまた被写体の名称と同じように、実は意外に記録されていないことが多い。この点は、撮影者の伝記的な情報と組み合わせることで、ある程度カバーできることがあるだろう。現在のところ開発中のデータベースでは、撮影者については略歴程度の情報を収載しているのみだが、今後、原板の情報蓄積とともに、撮影者の動静に関する情報(たとえば「xx年xx月xx日からxx日まで某所へ旅行した」)をある程度構造化した形で記述できるようにシステムの改良を図ってゆくことが必要ではないかと思う。当面は撮影者の履歴に関する情報の蓄積を進めることであろう。

田良島 哲(東京国立博物館博物館情報課課長)

## 7.2. 本年度作業概要

日本写真保存センターは写真原板の収集・調査・保存・利活用のためのアーカイブ化を行っている。またそのための写真原板データベースシステムの構築を行っている。写真原板データベースは「撮影者(写真家)」、「ホルダー(写真原板)」、「コマ」ごとにIDをつけた3階層構造で管理をしている。このシステムの構成としては管理用と閲覧用の2つのデータベースが存在する。これまで管理用データベースは市販されているデータベースソフトウェア「FileMaker」を、また閲覧用データベースは凸版印刷株式会社が提供しているデータベースシステム「SAI-CHI」を利用して構築してきた。

今年度は平成25年度から始めた「FileMaker」から「SAI-CHI」へ管理用データベースシステムを変更する作業を引き続き行うとともに、平成24年度に「SAI-CHI」で開発した閲覧用データベースの改修作業を行った。

ここで、管理・閲覧用の両データベースについて、今年度およびこれまでの取り組みを整理してみたい。

### 7.2.1. 管理用データベースのこれまでの取り組み

平成21年度から写真原板のデータベース化作業を始めた。管理用データベースの開発の取り組みを順を追って説明する。

#### 1) 「FileMaker」

写真原板データベースの作成初期から自由度が高いデータベースソフトウェア「FileMaker」を使用し開発を行ってきた。約4年運用し管理用データベースの基礎は固まったが入力項目が増え、テーブル同士の関連が複雑になり以下の問題を確認、平成25年度以降に管理用データベースの再構築を始めた。

「FileMaker」での問題点

- ・データベースの挙動が不安定になる
- ・データベースの全容を把握することが困難
- ・「FileMaker」で作成した管理用データベースの入力形式が様々な為、閲覧用データベースへデータを移行する際の変換作業の負荷が高い

## 2) 「SAI-CHI」

「FileMaker」で開発を行った管理用データベースで発生した問題を解決すべく、データベースシステム「SAI-CHI」で新たに管理用データベースの開発をはじめた。現在、「SAI-CHI」で開発を行った管理用データベースは実作業を行えるレベルにまでなっており、来年度から本格的な運用をはじめめる。

平成25年度から平成27年度までの管理用データベース「SAI-CHI」の開発の取り組みについては以下の通り。

### 【平成25年度】

再構築の第一段階として「FileMaker」で開発した管理用データベースの内容の調査・解読を行い、「SAI-CHI」を利用した管理用データベースの構造の設計を行った。変更点は以下の通り。

- ・閲覧用データベースとの親和性が高くなるよう管理用データベースのシステムも閲覧用と同じ「SAI-CHI」を利用
- ・「FileMaker」で開発を行った管理用データベースの基本的な構造はそのままに各項目および各テーブルの整理整頓

### 【平成26年度】

前年度に行った設計に基づき、細部を協議しながら「SAI-CHI」を利用した管理用データベースの実際の実開発を行った。年度末にはプログラムが完成し、操作性などの検証を開始した。

### 【平成27年度】

引き続き操作性などを検証し、問題がある部分の修正を行った。また、「FileMaker」で開発した管理用データベースのデータを「SAI-CHI」で開発した管理用データベースへ移行した。データが入った状態での操作性の検証と移行内容の確認をし、問題がある部分の修正を行った。修正内容については7.3.で紹介する。

## 7.2.2. 閲覧用データベースのこれまでの取り組み

収集・調査した写真原板を利活用できるよう管理用データベースに登録してあるデータを閲覧に適した形に整えたものが閲覧用データベースである。写真に興味がある方から研究者まで幅広い層が満足できる検索・閲覧システムを目指し、平成23年度から開発を行っている。現在は利用者を限定して閲覧用データベースを公開している。これまでの閲覧用データベースの開発の取り組みは以下の通り。

### 1) 「MuseScope」

平成23年度、管理用データベースの登録件数が増え、構造も安定してきたので写真原板に近い性質をもつ美術館・博物館の収蔵品をターゲットとしたデータベースシステム「MuseScope」を利用し閲覧用データベースの開発をはじめた。

「MuseScope」を利用した閲覧用データベースでは基礎的な部分の開発、及び実証実験を行うことができ十

分な成果を得られたが以下の問題が分かった。

「MuseScope」の問題点

- ・写真原板向きのシステムではないため閲覧用データベースとして不都合な部分が多い
- ・カスタマイズ性が低い

2) 「SAI-CHI」

◎平成24年度版「SAI-CHI」

データベースシステムをカスタマイズ性の高い「SAI-CHI」に変更し、「MuseScope」で得た基礎的な部分を活かしながら、写真原板にあった閲覧用データベースの開発を引き続き行った。「MuseScope」からの変更点は以下の通り。

「MuseScope」から平成24年度版「SAI-CHI」への変更点

- ・「SAI-CHI」を利用して新たに閲覧用データベースを再構築
- ・コマ詳細画面で新たに「コマ画像」と「コンタクト画像」を表示

それまでの「MuseScope」では「印刷物掲載画像」を中心に検索・閲覧をするシステムとしていた。平成24年度版「SAI-CHI」に変更してからはコマ詳細画面で印刷物に使われた「印刷物掲載画像」だけでなく、その画像の1コマ全体の「コマ画像」とその前後も含めた「コンタクト画像」を閲覧できるようにした。この部分を閲覧できるようにすることで、利用者がその1コマのこと、そのコマの前後、また撮影者の撮影の特徴などをより深く知ることが可能になった。これらはプリントだけでは得られない情報であり、日本写真保存センターの写真原板データベースの特徴である。



図1 印刷物掲載画像



図2 コマ画像

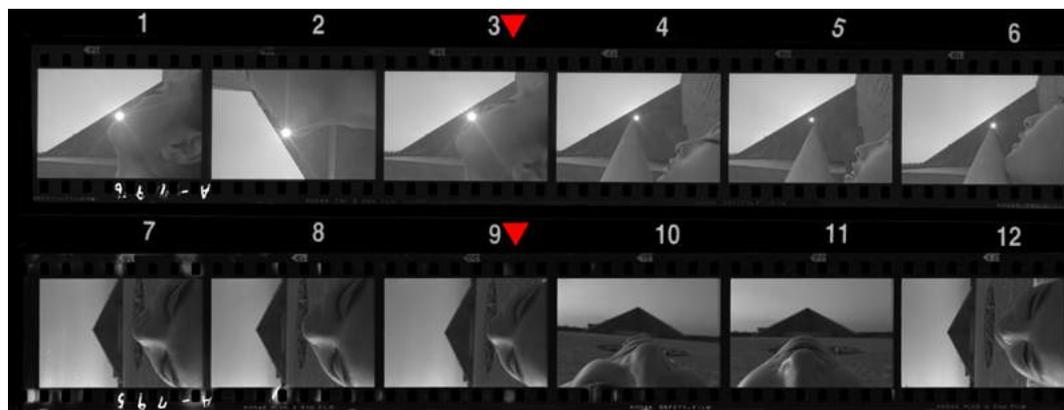


図3 コンタクト画像(佐藤 明撮影)

◎平成27年度版「SAI-CHI」

管理用データベースの改修が平成25年度に始まり、閲覧用データベースの開発は一時停止していたが今年度、管理用データベースの改修が一段落するのに合わせ閲覧用データベースの改修を再開した。平成24年度に「SAI-CHI」で開発した閲覧用データベースは検索性・閲覧性が向上し、平成24年度の実証実験のアンケートで良い反応が得られた。今年度は平成24年度版「SAI-CHI」から大きな変更はなかったが、検索性・閲覧性をより高める細かい変更があった。変更点の詳細は7.3.で紹介する。また今年度も実証実験を行いアンケートをとった。アンケートの詳細は7.4.で紹介する。

### 7.2.3. データベースの今後

今年度、管理用と閲覧用の両データベースが運用できる状態になった。2つのデータベースは「SAI-CHI」で開発しているので親和性が高い。

今後は管理用データベースから容易に閲覧用データベースが更新できる機能や定型フォーマットに従ったレポートの出力機能などの開発を優先的に行い、実際に使用して発見した問題点を改修してゆく。

笛木 諭(調査員)

## 7.3. データベース詳細

### 7.3.1. 写真保存センターデータベース開発について

昨年度までに、既存のファイルメーカーによる写真原板管理データベースを移行するべく、「SAI-CHI」を用いた管理用データベースを構築した。

今年度は、その新管理用データベースに対して、写真保存センターでの試用によるフィードバックを反映させた更新を行い、現時点での完成とし、データ移行を行った。また、併せて、2012年度に開発を行った実証実験用データベースを基礎とし、閲覧用データベースの開発を行った。

### 7.3.2. 管理用データベースの更新について

昨年度に完成をした管理用データベースについて、写真保存センターにて試用をした結果、運用していくうえで、修正をしていくべき点が出てきた。

写真保存センターと細かく協議をし、実際に修正をすべき点と、そうでない点とを選び分け、修正すべき点について、更新を行った。

#### 7.3.2.1. 修正点

下記の点について、その修正が必要となった。

- 1) 写真家マスター登録の受け入れ情報入力で、受け入れた箱の階層を「箱区分」として入力し管理する部分で、当初、3階層あれば十分管理できる想定で開発を行ったが、写真家によっては4階層以上あることが判明したため、その対応が必要。
- 2) 写真家マスター登録の初期調査票入力でA-Dストリップレベルの記録が必要であったが、入力する場所が存在しなかったため、「A-Dストリップ試験結果」の入力項目の追加が必要。
- 3) ホルダーマスター登録の詳細情報入力で、「原板メーカー」「原板サイズ」を選択肢からチェックし、該当がない場合に「その他」を選択する仕様にしたため、選択肢に無ければすべて「その他」となってしまう、原板メーカー名や原板サイズが判明していても具体的な情報を残すことができないため、その対応が必要。

同じく、コママスターの原板情報入力「原板メーカー」「原板サイズ」「劣化状態」も「その他」を選んだ場合に、具体的な情報が残せないため、対応が必要。

### 7.3.2.2. 修正内容の定義

前述の修正点について、下記のように修正内容を定義し、作業を行った。

- 1) 今後も写真家の整理状況により箱区分の深さは増える可能性があり、それを見越した区分設定は開発及び運用の負荷が大きいため、区分は現状通り3までとし、4以上の階層が存在する場合は、その情報をコメントとして記載できるように修正を施す。

図1 修正点1 仮箱コメントの追加

- 2) 写真家マスター登録の初期調査票入力に「A-Dストリップ試験結果」の入力項目を追加する。

| 仮箱内小計 |          | 受入内累計 |   | 仮箱内小計 |           | 受入内累計 |   |
|-------|----------|-------|---|-------|-----------|-------|---|
| 135   | 白黒ネガ: 0  | 木/    | 0 | 木     | 名刺乾板: 0   | 枚/    | 0 |
| 135   | カラーネガ: 0 | 本/    | 0 | 本     | 手札乾板: 0   | 枚/    | 0 |
| 135   | カラーポジ: 0 | 本/    | 0 | 本     | 4×5乾板: 0  | 枚/    | 0 |
| 120   | 白黒ネガ: 0  | 本/    | 0 | 本     | キャピネ乾板: 0 | 枚/    | 0 |

図2 修正点2 A-Dストリップ試験結果入力項目の追加

- 3) ホルダーマスター登録の詳細情報入力の「原板メーカー」「原板サイズ」に「その他」の場合の原板メーカー名や原板サイズが入力できるコメント欄を作成する。同じくコママスターの原板情報入力の「原板メーカー」「原板サイズ」「劣化状態」も「その他」を選んだ場合に、具体的な情報が入力できるコメント欄を作成する。

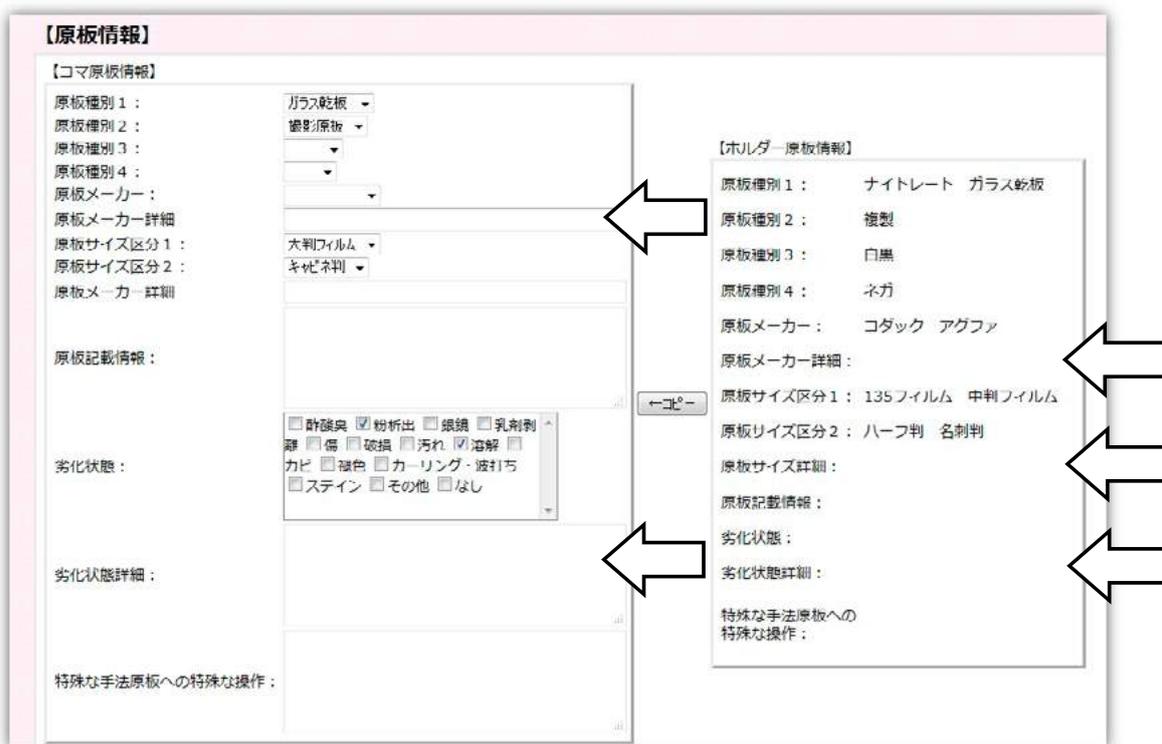


図3 修正点3 各種コメント欄の追加

### 7.3.2.3. 管理用データベースへのデータ移行

管理用データベースの確認/運用に向けて、既存のファイルメーカーで構築したデータを管理用データベースに移行する作業を実施した。

移行にあたり、下表のような移行用テンプレートを作成し、ファイルメーカーからテキスト形式で出力したものをテンプレートに嵌めていくとともに、下記項目に関しては、データの加工修正を実施した上で、管理用データベースへの移行を実施した。

- ・分割、結合を実施した項目
- ・辞書化し内容を統一した項目
- ・データ型を統一した項目

| 写真家マスター (photographer_master) |                 |            |            |            |               |                |                 |                 |                |                  |         |
|-------------------------------|-----------------|------------|------------|------------|---------------|----------------|-----------------|-----------------|----------------|------------------|---------|
| カラム名 (論理名)                    | 写真家番号           | 姓          | 名          | ミドルネーム     | 姓かな           | 名かな            | ミドルネームかな        | 名ローマ字           | 姓ローマ字          | ミドルネームローマ字       | 性別      |
| カラム名 (物理名)                    | photographer_id | lastname   | firstname  | middlename | lastname_kana | firstname_kana | middlename_kana | firstname_roman | lastname_roman | middlename_roman | sex     |
| 型                             | varchar(n)      | varchar(n) | varchar(n) | varchar(n) | varchar(n)    | varchar(n)     | varchar(n)      | varchar(n)      | varchar(n)     | varchar(n)       | int(n)  |
| 長さ                            | 20              | 50         | 50         | 50         | 50            | 50             | 50              | 50              | 50             | 50               | 3       |
| FMDテーブル名                      | 写真家マスター         | 写真家マスター    | 写真家マスター    | 写真家マスター    | 写真家マスター       | 写真家マスター        | 写真家マスター         | 写真家マスター         | 写真家マスター        | 写真家マスター          | 写真家マスター |
| FMD項目名                        | 写真家番号           | 写真家名姓      | 写真家名名      | 写真家名ミドル    | 写真家名ふりがな姓     | 写真家名ふりがな名      | 写真家名ふりがなミドル     | 写真家ローマ字名        | 写真家ローマ字姓       | 写真家ローマ字ミドル       | 該当なし    |
| FMD DBサンプル                    | 00001           | 大東 元       | 元          | あつた        | よしだ           | じゅん            |                 | OTSUKA          | Gen            |                  | 男       |
|                               | 00002           | 吉田 潤       | 潤          | よしだ        | じゅん           |                | YOSHIDA         | Jun             |                |                  | 男       |
|                               | 00003           | 田中 徳太郎     | たなか        | とくたろう      |               |                | TANAKA          | Tokutaro        |                |                  | 男       |
|                               | 00004           | 野上 浩       | ののかみ       | ひろる        |               |                | NOGAMI          | Toru            |                |                  | 男       |
|                               | 00005           | 川上 聖治      | かわかみ       | しげはる       |               |                | KAWAKAMI        | Shigeharu       |                |                  | 男       |
|                               | 00006           | 川島 浩       | かわしま       | ひろし        |               |                | KAWASHIMA       | Hiroshi         |                |                  | 男       |
|                               | 00007           | 竹内 廣元      | たけうち       | ひろみつ       |               |                | TAKEUCHI        | Hiromitsu       |                |                  | 男       |
|                               | 00008           | 名取 洋之助     | なとり        | よのすけ       |               |                | NATORI          | Yonosuke        |                |                  | 男       |
|                               | 00009           | 吉岡 尊造      | よしおか       | せんぞう       |               |                | YOSHIOKA        | Senzo           |                |                  | 男       |
|                               | 00010           | 中村 由雄      | なかつら       | ゆゆう        |               |                | NAKAMURA        | Yuujuu          |                |                  | 男       |

| コママスター (frame_master) |                  |             |            |             |             |                |                        |
|-----------------------|------------------|-------------|------------|-------------|-------------|----------------|------------------------|
| カラム名 (論理名)            | コマ番号             | ホルダー番号      | 登録番        | シリーズ名       | シリーズ名かな     | シリーズ名英文        | タイトル                   |
| カラム名 (物理名)            | frame_id         | holder_id   | register   | series_name | series_kana | series_english | title                  |
| 型                     | varchar(n)       | varchar(n)  | varchar(n) | varchar(n)  | varchar(n)  | varchar(n)     | varchar(n)             |
| 長さ                    | 20               | 20          | 100        | 500         | 500         | 500            | 500                    |
| FMDテーブル名              | コママスター           | ホルダーマスター    |            | コママスター      | コママスター      | コママスター         | コママスター                 |
| FMD項目名                | コマ番号             | ホルダー番号      | 該当なし       | シリーズ名       | シリーズ名かな     | シリーズ名英文        | タイトル                   |
| FMD DBサンプル            | 00001-00002-0001 | 00001-00002 |            |             |             |                | 『軌跡』より『死の街の記録』         |
|                       | 00001-00003-0001 | 00001-00003 |            |             |             |                | 『軌跡』より『死の街の記録』         |
|                       | 00001-00005-0001 | 00001-00005 |            |             |             |                | 『軌跡』より『やもり (英国年鑑より複製)』 |
|                       | 00001-00005-0002 | 00001-00005 |            |             |             |                | 『軌跡』より『子世 (複製) ライカ使用』  |
|                       | 00001-00005-0003 | 00001-00005 |            |             |             |                | 『軌跡』より『作品 (光画より複製)』    |
|                       | 00001-00008-0001 | 00001-00008 |            |             |             |                | 『軌跡』より『やもり (英国年鑑より複製)』 |
|                       | 00001-00008-0002 | 00001-00008 |            |             |             |                | 『軌跡』より『やもり (英国年鑑より複製)』 |
|                       | 00001-00009-0001 | 00001-00009 |            |             |             |                | 『軌跡』より『作品 (光画より複製)』    |
|                       | 00001-00009-0002 | 00001-00009 |            |             |             |                | 『軌跡』より『作品 (光画より複製)』    |

図4 データ移行用テンプレート

#### 7.3.2.4. 管理用データベースの今後について

写真保存センターのワークフローや保存・管理項目について、網羅をしたデータベースが構築できた。

現状、かなりの項目数が管理用データベース上にある。

実際の運用にあたって、もしくは、写真原板管理データベースとしての汎用性を考えていく場合には、項目を整理し、簡易化をしていく、もしくはそういった簡易バージョンなどを検討していく、などのことが考えられる。

#### 7.3.3. 閲覧用データベースの開発について

2012年度に、「SAI-CHI」を用いて実証実験用に閲覧用データベースを制作した。このデータベースをもとに、新たな実証実験や、実際の公開へ向けた取り組みとして、閲覧用データベースの開発を行った。

##### 7.3.3.1. 2012年度 実証実験用データベースについて

「写真原板」データの情報整理のあり方を考えるために共有の場を設け、情報登録にあたっての使い勝手、メタデータ項目の検証、想定されうるさまざまな分野での利活用を予想しての使い勝手の良さを模索することを目的に2012年度に「SAI-CHI」を用いた実証実験用の閲覧用データベースを構築した。

##### 検索機能について

→ フリーワード検索と詳細検索がタブで選択可能。キーワードは小分類で選択可能とした。

##### 検索結果表示について

→ 視認性を高めるため、画像サムネイルを表示。一度に30コマまで表示とした。

##### 詳細画面について

→ 印刷物掲載画像、コマ画像、コンタクト画像、メタデータを表示した。各画像は拡大表示可能である。

##### 7.3.3.2. 2012年度実証実験用データベースからの変更点

実証実験でのアンケート結果等を受け、2015年度は、操作性、閲覧性の改良を加えるとともに、画像およびメタデータを管理用データベースに移行したデータのほぼ全点を閲覧用データベースにも登録することで、パフォーマンス等も含めた操作性、閲覧性の再確認を実施した。

主な変更(改良)点は、以下の通り。

- ・フリーワード(キーワード)検索と詳細検索の掛け合わせ検索ができるようにタブでの切り替えをやめ、検索は1ページに収める。
- ・キーワードは小分類だとかえって使いづらいという意見から、大分類のみの選択にとどめる。
- ・トップ画面で撮影者略歴(紹介)だけでなく、写真集紹介もボタンクリックで表示できるようにする。
- ・横長の画面が増えてきているため、検索結果画面は最大横7列のサムネイルが表示できるようにする。
- ・検索結果画面のページ送りは現在表示中のページが何ページなのかをわかりやすく表示する。
- ・詳細画面のコンタクト画像は画像クリックで拡大表示を行い、更に続けて登録画像の原寸大表示ができるようにする。
- ・項目の名称、一覧表示に表示するメタデータ種別、詳細画面のメタデータの表示デザイン等、細かな修正、調整を行う。



図5 変更後検索画面

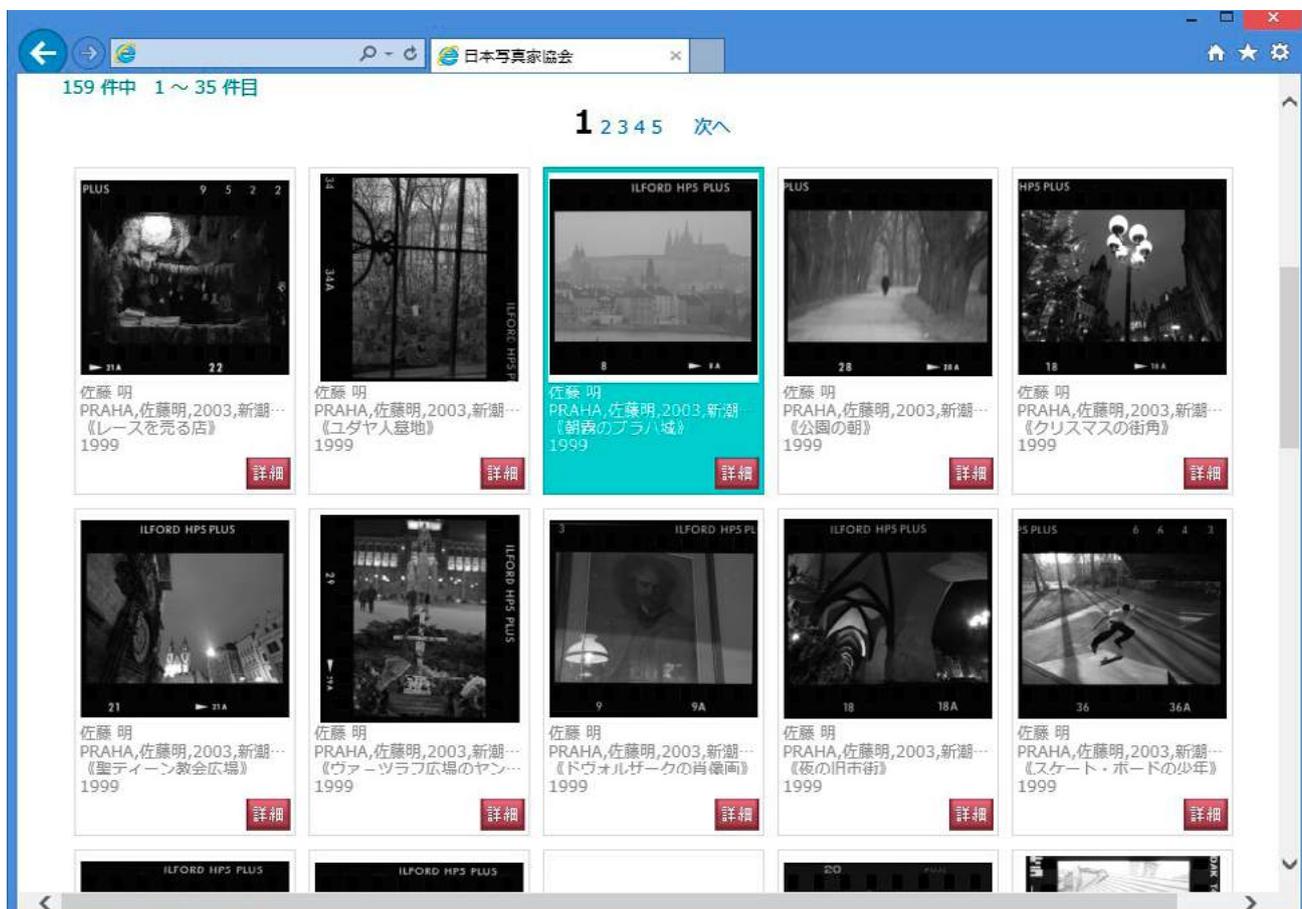


図6 変更後検索結果表示画面



図7 変更後詳細画面

### 7.3.3.3. 実証実験データベースへの登録

管理用データベースに移行した画像およびメタデータのほぼ全点を閲覧用データベースに登録を行った。

撮影者：49名

コマ画像数：3,003点

### 7.3.3.4. 実証実験データベースの今後

実証実験データベースの今後として、以下の課題への対応展開が考えられる。

- ・受入情報管理拡充
- ・保管情報管理拡充
- ・管理用データベースから閲覧用データベースへのデータ更新機能の付加
- ・閲覧用データベースの検索性、閲覧性の向上
- ・他館連携方法の模索

#### 7.3.4. 写真保存センターデータベースの今後について

管理用データベースについては、ファイルメーカーからの移行を完了し、こちらを用いた運用が進められていく。その中で、適宜、アップデートを考えていきたい。

閲覧用データベースについては、実際の公開をふまえ、サーバー環境の見直しから、ライツマネジメントに対してどのようにケアをしていくか、など、検討していく項目は多い。

また、今年度でおおよそ形となった原板の記録・保存・管理に関する機能のみではなく、新しいステップとしては、利活用およびそのための貸出管理や他館連携などの、データベースの汎用化や、データベースを軸とした展開など、将来像に対しての効果的な開発が必要となっていく。

奥平 正幸(凸版印刷株式会社 トップランアイデアセンター 関西TIC本部 ICTソリューション部 課長)

木下 悠(凸版印刷株式会社 情報コミュニケーション事業本部 トップランアイデアセンター クリエイティブ本部 映像企画部 アーカイブIT)

### 7.4. 平成27年度「閲覧用データベース公開実証実験」のまとめ

#### 7.4.1. 前回までの実験の経緯

平成23年度から行ってきた「文化関係資料のアーカイブ構築に関する調査研究」では、収集・保存された「写真原板」のデータベース(以下DBとする)化の手法を研究すると共に、アーカイブした写真原板情報の有効な利活用方法、公開方法を模索するために平成23年度と平成24年度の2度にわたり「DB公開実証実験」をおこなった。

両実験では「写真原板」データにかかわる情報公開のあり方を考えることを目的とし、作成した「公開用DB」を写真関係の有識者に閲覧していただいた後、アンケートにご回答いただき、メタデータ項目や、さまざまな分野での利活用を想定しての「公開用DB」のあるべき姿を模索した。

平成23年度公開実験では、凸版印刷株式会社の開発したソフト「MuseScope」で作成をした。しかし、「MuseScope」は、コマ画像の閲覧・利用には相当程度有効であったものの、元来東京国立博物館の「ミュージアム資料情報構造化モデル」をもとに一般的な博物館・美術館資料を想定して作られたシステムであったため、「写真家」、「ホルダー」、「コマ」がそれぞれ別種の情報を持つ「写真原板DB」を作成するシステムとして、構造が適切でない部分があった。

平成24年度公開実験では、前回実験をふまえ資料の特性にあわせて項目の追加や構造の変更が容易な、同じく凸版印刷株式会社のアーカイブシステム「SAI-CHI」を採用し、また平成23年度実験でいただいたご意見も参考に「写真原板」の特徴に、より適合した構造のDBを作成した。

両公開実験では、大学等の研究機関の教員および学生、美術館・博物館・図書館などの関係者、新聞・出版などのメディア関係者、写真機材メーカーあるいは写真アーカイブなどの関係者、写真家など、写真関係有識者に公開用データベースを試用していただき、ご意見をうかがった。有効回答者はそれぞれ平成23年度62名、平成24年度75名で、寄せられたお答えは、量的にも内容的にもかぎられたものではあったが、利活用にあたっての利便性を調査するという趣旨からは所期の目的は達せられた。

両実験の結果、閲覧をするためのDBとしては、平成24年度実験においてSAI-CHIで作成した「公開用DB」の見せ方、メタデータ項目で大筋は適切であるという結論に至った。

#### 7.4.2. 平成27年度公開実証実験用 閲覧用DBの特徴

平成27年度は、実際に収蔵する写真原板のデータを格納した管理用データDBが完成したことを機に、管理用DBからデータを移行して実際のデータを閲覧できるシステムを作成し(詳細7.2.,7.3.)、操作感をうかがった。

平成23年度、平成24年度の実験では閲覧して使用感のご意見をいただくDBは「公開用DB」と称していたが、使っていたコンタクトの不特定多数への公開は、著作権など未解決の問題が多く、公開範囲については今後の検討課題であることが実験を通じて明確になった。そのため本実験でお見せしたDBは、不特定多数への公開という印象を受けるといふ「公開用DB」という名称ではなく、公開範囲にかかわらず、「利用者が閲覧するDB」のテスト版であることを明示するため、「閲覧用DB」と称することとした。

本年度お見せした閲覧用DBの構造は、平成24年度に作成したSAI-CHI版公開用データベースを基本とし、前回までの公開実験でいただいたご指摘を元に、コンタクト画像の見せ方、操作感の向上に修正を加えた。

また、閲覧用DBの基本的な構成、メタデータ項目、画面については、前回実験版の公開用DBを踏襲している。本実験で使用した閲覧用DBの前回公開実証実験用DBとの大きな違いは以下のとおりである。(詳細7.2.,7.3.)

- ① 閲覧できるデータが、実際に格納されているデータであること
- ② 前回まで被写体キーワードと呼称していた被写体別分類を、「カテゴリ検索」とし、  
■風景 ■建造物 ■産業 ■工芸・芸術 ■動植物・自然 ■人物 ■社会・文化・風俗 ■事件・災害・戦争として、大項目のみとしたこと。
- ③ 写真原板のコンタクト(密着)画像を拡大して見られるようにしたこと。

その他、操作の方法など前回実験でご指摘いただいた部分は適宜修正をした。

カテゴリ(被写体キーワード)のうち前回まで設定していた、中項目、小項目は、恣意的で実用性が低いとのご指摘を多くいただいた。また、入力の手間が非常にかかるにもかかわらず、入力者によるばらつきが防ぎづらく実際の運用上、質を一定に保ちづらいことから、試験的に廃止した。

今回ご意見をうかがった閲覧用DBでは以下の情報が見られる。

- 文字情報  
撮影者/ 撮影年月日/ 撮影場所/ カテゴリ/ タイトル・キャプション/ 掲載媒体情報/ 解説/ 原板種別(白黒かカラーか、サイズ等)/ コマ番号/ 所蔵
- 画像情報  
印刷物掲載画像(写真集、新聞、雑誌などで発表された形態。トリミング、諧調などの画像)、コマ画像(印刷物に掲載されたコマをトリミング、修正などを行わず、パーフォレーションなど周囲の情報まで含めてスキャンした画像)、コンタクト画像(該当する受付番号のホルダーに入っていたすべての写真原板のコンタクト)

### 7.4.3. 公開実証実験の詳細

#### 7.4.3.1 質問項目

実験では以下の質問をうかがった。比較しやすいよう、前回実験、前々回実験と基本的に同種の質問を設定した。

### 平成27年度 閲覧用データベース アンケート項目

#### 1. 閲覧用データベース全体について

- 1-1. 全体を通して印象はいかがですか。問題点はありましたか。
- 1-2. 今回の修正点、コンタクト画像の拡大、トップ画面の使用感、検索カテゴリーについての修正はいかがですか。
- 1-3. 本年度は、管理用DBのデータを閲覧用DBへ、直接反映できるシステムとなり、閲覧用データベース独自に入力をするシステムではなくなりました。このシステムについてはいかがですか。
- 1-4. サイトの構成はいかがですか。詳細画面、写真家略歴、ヘルプはいかがですか。
- 1-5. 閲覧用DBは公開範囲を申込みのあった研究者などに限定しての公開を考えています。公開範囲について、いかがお考えでしょうか。

#### 2. 検索項目、メタデータについて

- 2-1. 他にあと良い項目はありますか(具体的に)
- 2-2. 被写体に関するカテゴリー検索は  
■風景 ■建造物 ■産業 ■交通 ■工芸・芸術 ■動植物・自然 ■人物 ■社会・文化・風俗 ■事件・災害・戦争  
の大項目のみにしぼり、「すべてを含む」か「いずれかを含む」で検索が可能です。従来設定していた中・小項目は省略しました。このカテゴリーはいかがででしょうか。(個別の情報は「解説」の言葉を検索にかかるようにすることで、検索の精度をあげようと考えています。)
- 2-3. 「詳細ページ」の「解説」では、他の項目では掲載しきれなかった、該当コマの被写体内容についての個別の記述と、詳細情報をのせます。全文検索の際、この解説からもキーワードが拾われます。この「解説」はいかがででしょうか。

#### 3. 画像について

- 3-1. 高精細データは、将来、ご希望があったときに改めて、取り直して提供する方針で、データベースの画像はサムネール程度と考えていますが、今後もこの方針でよろしいでしょうか。
- 3-2. 欲しい画像を検索することができましたか。
- 3-3. 画像一覧は使いやすいですか。

#### 7.4.3.2. 方法

本実験閲覧用DBの操作をしながらご感想をうかがうため、平成28年2月25日～2月29日の期間中、日本写真保存センター作業室へご来室いただき、操作方法を直接ご説明し、ご意見をいただいた。一部ご来室が難しくメールでのご回答をいただいた方もいた。

#### 7.4.3.3. ご回答について

直接ご回答をいただいたため、個別の項目に一つ一つ対応したご回答だけではなく、総論としてのご指摘を多くいただいた。そのため、以下、ご回答の内容は大きなグループ分けに留め、いただいたご意見をランダムに記録する。

##### 7.4.3.3.1. 全体について

管理用DBから閲覧用DBへデータを移行するシステムを含め、画面、表示項目などおおよそ前回より改善された。細部は今後ブラッシュアップをしていけばよいとのご意見をほぼ全員からいただいたが、改善、検討をすべき点として、以下、ご指摘をいただいた。

- ホルダー情報として、コンタクト画像やホルダー記載情報を持っていることが写真保存センターの大きい特徴である。現状は詳細画面があるのは「コマ台帳」のみであり、プリントだけのデータベースと似た印象になってしまう。将来は「ホルダー台帳」の詳細画面も作ると良いのではないか。
- コマ画像被写体内容についての記述が薄く研究用途には不満である。写真家経歴、個々の画像の被写体、撮影の事情、写真集掲載の歴史などの詳細情報も欲しい。しかし、個々の画像の解説入力、保存センターの調査員だけで入力していくことが現実的に難しいことも理解できる。調査委員をはじめとする外部の専門家の力を借りることを考えてはいかがか。また、研究用途とする場合、画像、タイトル、すべて典拠は明示してほしい。(特に初出)
- 外部の力を借りる場合は、センターで使っている管理用データベースと同じインターフェイスの入力ファイルを渡して入力していただくなど、協力を得やすい方法を考えると良い。方法さえ簡便であれば、写真家本人と長く付き合いがあった編集者や遺族など、喜んでご協力いただける方も多いただろう。また、出版社などに既にあるメタデータはできるだけいただき、センターのデータベースへ統合すると良いだろう。新聞社、美術出版を行ってきた出版社は相当な情報を持っている。ただし、デジタル化されていない場合も多いので、入力をどうするかは課題だろう。
- 実際の資料を収蔵していない外部の研究者で調査できること、一般的な事実などは必ずしも、アーカイブ情報として必須ではない。研究レベルの詳細な情報を個々の画像解説に入れることは、写真原板で処理しなければいけない量を考えると現実的ではないだろう。
  - メタデータとしては写真原板を収蔵している当事者でなければわからない情報(実物サイズ、実物、来歴)の情報の充実を優先させると良い。
- 他機関、研究者による図録の説明文を、許可をとり典拠を明確に表示して解説へ入れると信頼性がある解説となるだろう。
- 東京国立博物館では、所蔵品データベースの公開のレベルを1) 内部管理用 2) 来館者、申込者のみに公開する限定公開用 3) 不特定多数に公開できる一般公開用 に分けている。コンタクト(密着)の不特定多数の利用者への公開は、著作権者人格権から問題が多いが、研究対象としては重要な情報であり写真原板収蔵機関としては公開すべきであるだろう。また、Web上での不特定多数への公開も、写真原板データベースの公開という意味では公益のため必須である。従って、写真原板データベースも博物館の公開レベルを参考に、
  - 1) 著作権者情報などが格納された、内部のみのデータベース
  - 2) 特定の少数者へコンタクトも公開する限定公開用データベース
  - 3) 写真家が公開を事前に認めた画像だけをネット上で閲覧できる一般公開用データベースの3段階に分けての公開を考えてはいかがか。
- コンタクト画像を限定公開する場合は、閲覧はできるが印刷はできない、などの制限を設けた方がよいだろう。
- 可能であればWeb上でもコンタクトを見せたい。そうしないと一般的なフォトライブラリーのような印象になる。
- 検索できるデータが少ない。活動を続け、データ数を増やしていくことは続けるべき。
- インターフェイスは利用者主体で見やすくし、書体、色使い、動きなども今少し洗練させる必要がある。データがない撮影者は選択できないようにする、選択した画像を貯めておける一時的フォルダーを用意する、などストレスなく動かせるように改善をしていくべきだろう。現状は、次の動作に移るたびに新しいページが開く仕様だが、同じページ内で遷移する方が、ブラウザの「戻る」ボタンも使えるため、一般に使いやすい。
- 管理用DBから閲覧用DBへデータを移行させる方式自体には問題はないが、自動的に移されるのではなく、フローに確認、承認の段階を必ず入れるべきだろう。
- 全体的に「見てもらいたい」「行ってもらいたい」画面へ誘導して素早く検索できるようにし、このDBの特徴となる部分を大きく扱うと良いだろう。
- 研究目的か、利活用目的かが定まっていない印象を受ける。利用者像を明確に絞りたい。他の商業用DBで既に行われている作業は行う必要がない。作品としての写真のDBではなく、他にはない資料としての写真のDBとして専門性を打ち出していくべきではないか。
- 最終目的、利用者を最初から決めることは難しい。基本的な情報を確実に検索できれば良い。
- 将来の連携を考えた場合、手始めにコマ画像のデータを100点ほど、試験的に「文化遺産オンライン」などと共有をして結果を見ることも検討すると良いだろう。

#### 7.4.3.3.2 著作権・利活用について

■コンタクトの公開にあたって問題となる著作権は「公表権」。「公表権」は「著作人格権」に属し譲渡できない。著作者自身の意に反するような公表はできない。(著作権法 第2章、第5節、60条)。コンタクトの公表は、「意志に反するような使い方をしない」研究者への公開など限定的な範疇にとどめることを、ご遺族、本人に事前に説明するとよい。

また常識の範囲で公開を行うことを、著作人格権を所有する方との合意がとれるのであれば、Web上でのコンタクトの公開も行うことは不可能ではないだろう。ただし、Web上での公開にあたってはプライバシーポリシー、使用原則の明示は必須である。また、一度公開を行ってもご遺族などから異議申し立てがあったら、該当する写真家の情報のみを非公開にできるような設定しておくべきだろう。

しかし、あまり厳しくとらえず、コンタクト他の画像が一切公開できないようになると、日本写真保存センター本来の使命が果たせなくなるおそれがある。原則は理解しつつも、適宜、ご遺族、本人の了承を得つつ運用していくことが望ましいだろう。

■商業利用については、別途ご相談いただく形が良い。基本的には研究・教育目的の利用は無料、商業利用は有料とする方針を基本とすれば良いだろう。

■被写体の肖像権については、そのつど、利用者の使用目的を確認した上で、商業利用の場合、不特定多数への公開を行う場合などは、利用者自身が処理を行っていただくように求めることが現実的と思われる。

■法人名、団体名での写真家名の表記はこれからも検討していくべきだろう。特に第二次世界大戦以前は著作権に対しての意識が薄く、著名写真家が撮影しても撮影者名不詳であったり、代表者の名前になっていることが多いが、可能な限り撮影者名を調査、入力すると良い。

#### 7.4.3.3.3. 検索項目について

■検索カテゴリは、画像の絞り込みには向かない。個別の情報をもっとレコードに持たせて、フリーキーワードで検索できるようにするほうが「写真原板」にあった方法ではないかと思う。そのためには解説の充実が課題だろう。

■検索カテゴリは、詳細に見ると、しばしばあてはまらないカテゴリに入れている画像がある。(例:「工芸」にわら細工で縄を作っている女性の写真がヒットする、など。)カテゴリは入力方法から見直しが必要ではないか。現状では実用性が薄いように思う。

■教育の観点からは、写真表現の分野、「静物」、「ヌード」といったカテゴリもどこかで検索できると良い。

■項目の並び順は再考すべき。「タイトル」が一番上の方がわかりやすい。

■「印刷物掲載画像」の語がわかりづらい。写真展、アルバムで「公開」した画像はどうなるかも不明瞭。再検討が必要だろう。

■「タイトル」は必須としないと検索が難しくなる。写真家、編集者による発表時のタイトルが複数ある場合や、まったくない場合でも何らかの「タイトル」は入れられるように、「タイトル」欄は複数設けるとよい。

■「タイトル」を複数付与する場合、「タイトル」の性質によって入力する欄を分けると混乱が避けられる。例えば以下の5つ程度の欄があると良いのではないか。

①初出印刷物発表時の「タイトル」 ②展示のときの「タイトル」 ③文化財としての「タイトル」 ④箱書き、メモなどに書かれていた「タイトル」 ⑤日本写真保存センターで便宜的につけた「タイトル」

特に、他の「タイトル」がない場合は、センターで必ず「タイトル」を入れると良い。センターでタイトルをつける場合は、内容がわかるような描写的な「タイトル」をつける。例えば、「原子爆弾投下後の長崎で配給のおにぎりを手に持って立つ母子全身像」、「和服を着た若い女性が扇風機の前で微笑む半身像、東芝広告使用」など。「タイトル」づけのためのセンター内のガイドラインを作ると良い。

「タイトル」の性質によって、使う記号や表記を変えるルールを作るとよりわかりやすいだろう。(例:写真家がつけたタイトルは[ ], センターでつけたタイトルは<>, など)

■写真集他の印刷物にあったタイトルを表示するときは、出典を明示すべき。

■研究目的の場合、撮影年と印刷物掲載年の違いを明示していないと使いにくい。

■写真のデータベースではタイトルは内容を示すもの(例:銀座・女性)を入れ、発表時の題名のようなものはキャプションとして記録しているところが多い。

■撮影年だけでは不十分。できるだけ「撮影日」もほしい。

■印刷形式によって撮影方法やネガの現像方法が変わる場合もある。撮影された画像がどのような印刷をされたかの記録も

あると良い。

- 来歴として、印刷会社、編集者、出版社の名前と、印刷、出版した経緯もわかれば記載すると良い。特に印刷を最終形式と考えていた写真家では必須であろう。具体的にはVIVOの写真家(川田喜久治、佐藤明、丹野章、東松照明、奈良原一高、細江英公)以前の写真家の多くは印刷を最終形式と考えていた。
- 「写真集一覧」に雑誌、新聞も混ざっているのは紛らわしく、信頼性も薄れる。表記方法を再検討すべき。雑誌の号数表記は煩雑でわずらわしいが、本当に必要か検討し、必要な場合でも表示方法は検討をする必要があるだろう。
- フリーキーワード検索はかなり有効だと感じた。例えば「日本海」を入力すると「合同海軍葬入場門で葬列に敬礼する大日本海洋少年団員」といったレベルまで検索できた。
- 「撮影者紹介」のページ名はわかりづらい。「収蔵写真家紹介」とした方がより内容を正確に反映していると思う。
- 教育的には「フィルムフォーマット」や「技法」の項目もあると良いと感じた。

#### 7.4.3.3.4. 画像・操作感について

- コンタクト画像を大きく表示できるようにしたことは良い。写真原板DBとして期待される重要な機能であるため、コンタクト表示は引き続き続けると良い。限定公開の閲覧DBでは、ホルダー画像、資料メモ画像も閲覧できるようにすると良いのではないか。
- トップ画面で「撮影者一覧」をクリックしたら、すぐに検索できると良い。
- 「印刷物」「プリント」「コンタクト」の遷移がわかりづらい。
- 「検索結果一覧」の順番が何の順番かわからないので、但し書きが必要。他も凡例がわかりにくいので、わかりやすい場所に明示すべきだろう。
- 「検索結果一覧」で画像を選んだ時に出る「個別画像表示」が写真画像のみで文字情報がないため使いづらい。検索結果で選んだ後はすぐに「詳細画面」に移るか、画像画面が出たとき写真家名、タイトル、撮影内容、撮影年月日などある程度のメタデータが出るようにしたほうが良い。キャプション・タイトルは文頭だけでなく、すべて閲覧できると良い。現状では、タイトルがすべて同じものが出るのが多く、画像の詳細がわからない。一覧につけるメタデータを再検討して一覧でも内容詳細がある程度わかるようにすべきだろう。
- 画像の表示方法は、米国議会図書館のサイト、Prints and Photographs Online Catalogueが参考になる。(画像はList,Gallery,Grid,Slideなど、様々な表示で見ることができる。)

#### 7.4.4. 回答者

今回は、写真原板DBのこれまでの経緯と、本調査・研究の基本理念にご理解がある以下の9名にご回答をお願いした。(50音順、敬称略)

小池汪(調査補助員)、白山真理(調査委員)、瀬尾太一(調査委員)、大亀哲郎(調査委員)、高橋則英(調査委員)、多田亞生(調査委員)、田良島哲(調査委員)、丸川雄三(国立民族学博物館)、山口孝子(調査委員)

#### 7.4.5. おわりに

今回は、教育、出版、写真家、博物館・美術館、情報工学、著作権関係のそれぞれの視点からの、ご回答をいただいた。基本的には今回作成した閲覧用DBで進めて良いというご指摘が大半であったことから、新年度からは、公開実証実験で作成した閲覧用DBをもとに、いただいたご意見をもとに修正を行い、閲覧用DB実用化へと作業を進めていきたい。「解説」の入れ方についてなど、一部、相反するご意見をいただいたところもあり、その点は公開範囲の検討も含め、再度検討を行う予定である。

中川裕美(調査員)

## 8. 情報発信

日本写真保存センターでは、本年度も引き続き、セミナー・学会・ウェブサイト他で調査成果の情報発信を行った。昨年度までの広報により、写真原板の保存とデータベース化については、写真家ご自身やご遺族、一般の写真愛好者という、基礎的情報を必要とする層の他に、写真原板を所蔵し、ビネガーシンドローム他にある程度知識がある美術館・博物館・図書館・大学・企業博物館などの専門家層からも、写真原板の保存・アーカイブ化について、より深い情報を必要とされていることが明らかになった。

そのため本年度は、啓発を目的とした基礎的情報発信を引き続き行うことに加え、写真原板の保存に携わっている専門家層へ向けて、踏み込んだ情報発信と専門家層との情報交換にも力をいれた。新聞、雑誌、TVなど各種メディアでの取材も増えた。

### 8.1. 研究集会、講演、展示

#### 8.1.1. 文化財保存修復学会第37回大会 ポスター発表

- ・日 時： 2015年6月27日
- ・会 場： 京都工芸繊維大学
- ・主 催： 一般社団法人文化財保存修復学会
- ・発表者： 山口 孝子調査委員

タイトル：「TACフィルムの劣化挙動研究 ―来歴の異なるフィルムと劣化加速度を比較して―」

発表内容：(1)A-Dストリップに対する酢酸の放出量の振れ幅 および

(2)劣化加速試験機による劣化フィルムの作成について、2つの実験を行った。

(1)は酢酸ガスの発生量から求めた放散速度と通気温度との関係を調べた結果、A-Dストリップレベルの2と3では酢酸放散量の結果が逆転した。また、昨年度の実験結果と今回の結果を全てプロットしたところ、同一A-Dストリップレベルであっても、かなり放散量の振れ幅が大きかった。これは、実験を複数回実施したため、試料が保存環境の変化に影響を受けた可能性も考えられる。このことを受け、試料の選択の際は標準化をおこなう必要がある。(2)の強制劣化条件は、密閉容器の体積に依存するものの、人工的にA-Dストリップレベル1〜3に値する劣化フィルムのレシピは得られた。

2つの実験の詳細は、「6. 写真原板劣化実験」(p.29)を参照されたい。

大関 直樹(調査員)

#### 8.1.2. 「原爆展」について

「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾 被爆から70年」展

平成27年8月4日から30日まで、JCHフォトサロンにて開催

(主催：公益社団法人日本写真家協会「日本写真保存センター」、一般財団法人日本カメラ財団)

#### はじめに

2015年は原子爆弾が投下されてから70年になる。

原子爆弾による被害などを撮影した写真や記事については、戦時中は日本の軍部によって秘密にされていた。また敗戦後はGHQの報道管制下におかれ、私たちの目に触れることはなかった。被爆写真が見られるようになったのは、1952年の講和条約が結ばれてからで、一般の人たちが原子爆弾の威力、恐ろしさを知るようになった

のである。その後、幸いにも長い平和な時期が続き、戦争や原子爆弾の体験が忘れられ、また被爆を体験された方々も高齢になり、当時のことを伝えられる方も少なくなってきた。

被爆70年後である2015年は、その体験を直接我々に伝えることが出来る大切な年になるかもしれない。

そこで今回、「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾 被爆から70年」展を企画し、写真を通じて過去の出来事を知っていただくとともにこれからの未来を創っていくうえで、ぜひ参考にさせていただきたいと願っている。

#### 企画準備について

原爆写真展のきっかけは、山端祥吾氏から父庸介が撮影したナガサキの原爆被害記録フィルム3本(78コマ分)を写真保存センターに寄託したことに始まる。センターでは、歴史的、文化的価値を有する写真原板の収集・保存と利活用を図る一環として、原爆写真展の企画を進めた。

山端以外の原爆写真については、後述の通りヒロシマでは10名の写真家の写真を広島平和記念資料館、中国新聞社、朝日新聞社、田子はるみ氏から、またナガサキは、林重雄の写真を長崎原爆資料館から写真原板を提供していただいた。なおヒロシマ・ナガサキの原爆写真は全て、原爆投下から3か月以内に撮影されたものとした。

原爆写真展のメディア対応として、記者発表会も行った。写真展の直前の取材もテレビ、新聞社から多数受け、放映や記事を掲載されたことで動員に協力いただいた。

更には米軍の新聞Stars and Stripes紙が取材し全世界に向けて報じたことである。

このように写真原板の提供を快く承諾していただいた資料館、新聞社、遺族、また写真展開催を紹介していただいたメディア、さらには会場の提供、額装、図録の印刷、会場の受付等でお世話になった日本カメラ財団等々の協力なしには成功できなかった。

また原爆写真展に合わせて、JCIIビル6階で8月5日、14歳で被爆された橋爪文さんをお招きして「ヒロシマからの出発」と題する体験談をお聞きした。

8月8日には「記録の重みー被爆直後を撮影したフィルムの保存を」の題の下「文化財としての写真」を東京国立博物館の田良島哲氏、また「原爆写真の思想」を写真史家の金子隆一氏が講演した。

#### 「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾 被爆から70年」展

日時：平成27年8月4日～8月30日 10:00～17:00

月曜休館 入場無料

場所：JCIIフォトサロン

〒102-0082 東京都千代田区一番町25 JCIIビル1F

Tel 03-3261-0300

主催：公益社団法人日本写真家協会「日本写真保存センター」

一般財団法人日本カメラ財団

後援：中国新聞社

公益財団法人広島平和文化センター平和記念資料館

協力：長崎原爆資料館、朝日新聞社

一般社団法人日本写真著作権協会

山端祥吾、田子はるみ、岸田哲平、塩浦雄悟

協賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社

監修：田沼武能

編集：松本徳彦、白山眞理

「展示作品」

ヒロシマ・ナガサキ被爆直後から1945年10月末までに撮影された写真で構成。  
撮影当時の撮影フィルム、乾板などからプリントした写真約60点を展示。

「展示写真家」

<ヒロシマ>

|                   |  |
|-------------------|--|
| 深田敏夫(1928～2009)   | 原子爆弾投下直後の原子雲を撮影<br>2点(寄託 広島平和記念資料館)            |
| 松重美人(1913～2005)   | 自宅で被爆。被爆者の救援状況を撮影<br>3点(所蔵 中国新聞社)              |
| 岸田貢宜(1916～1988)   | 被爆翌日朝の爆心地付近を撮影<br>3点(所蔵 岸田哲平、提供 広島平和記念資料館)     |
| 尾糠政美(1921～2011)   | 陸軍船舶司令部写真班員として被爆翌日から撮影<br>3点(所蔵 広島平和記念資料館)     |
| 川原四儀(1921～1972)   | 東京第一陸軍病院軍医に同行して惨状を撮影<br>2点(所蔵 広島平和記念資料館)       |
| 宮武 甫(1914～1985)   | 朝日新聞記者として8月9日から被爆した市内を撮影<br>2点(所蔵 朝日新聞社)       |
| 佐々木雄一郎(1917～1980) | 市内のスナップを30年にわたって撮影<br>2点(所蔵 塩浦雄悟、寄託 広島平和記念資料館) |
| 菊池俊吉(1916～1990)   | 原爆被災調査団に随行し10月1日から救護状況撮影<br>9点(所蔵 田子はるみ)       |
| 林 重男(1918～2002)   | 原爆被災調査団に随行し建造物を撮影<br>5点(寄託 広島平和記念資料館)          |
| 田子恒男(1924～1998)   | 菊池、林に同行し調査状況を撮影<br>1点(寄託 広島平和記念資料館)            |

<ナガサキ>

|                 |   |
|-----------------|---|
| 山端庸介(1917～1966) | 被爆翌日早朝から約8時間被爆状況を撮影<br>24点(所蔵 山端祥吾、寄託 日本写真保存センター) |
| 林 重男(1918～2002) | 原爆被災調査団に随行して被爆状況を撮影<br>3点(寄託 長崎原爆資料館)             |

「講演会の開催」

8月5日 14:00～16:00 JCIIビル6F 聴講無料

「ヒロシマからの出発」講師：橋爪文(詩人)

8月8日 14:00～16:00 JCIIビル6F 聴講無料

「記録の重み・被爆直後を撮影したフィルムの保存を」

「文化財としての写真」講師：田良島哲(東京国立博物館)

「原爆写真の思想」講師：金子隆一(写真史家)

## 写真展後記

2015年は戦後70年という節目の年であるとともに戦争や原爆体験者が少なくなる中で、TVや新聞などで当時の出来事について紹介する機会が多かった。日本写真保存センターでは、1年ほど前から構想を温めながら原爆写真展の準備を行い、2015年8月4日～30日までJCIIフォトサロンで原爆写真展を開催した。この期間の来場者数は8,000名を超えるという、写真展としては記録的な来場者があり、盛況裡に終えた。原爆写真展はTVや新聞でも取りあげられたので、会場内は来場者が切れることなく終日混雑していたが、混雑の割には静寂が支配していた。約60点の写真は原爆投下から3か月以内に撮影されたもので、熱線と爆風による焦土化した市街の惨状、やけどを負った被爆者たち、救護を求める人々、炭化した遺体等の衝撃的な写真群の前に、来場者たちは圧倒され息を詰めながら写真とともにキャプションを読んでいた。

また今回の原爆写真展では、ご年配の方、家族連れ、昼休みに訪れたOL、カメラを手にした若者たち等の多彩の来場者に対してアンケートをお願いし、多くの感想を聞くことが出来た。(401名分) その内容を要約する。

「衝撃もさることながら、展示されているような事実を伝える写真が、ほとんどメディアで公開されてこなかったこと、被爆直後を撮影したフィルムの破棄が命じられたにもかかわらず、相当数の原板が残されていたことなど初めて知った事実に驚いた。歴史の記録として今後も繰り返し伝えてほしい。」

原爆写真展を通じ、写真という精細な描写による迫真性と瞬間の記録性の価値や原爆被災という歴史的にも貴重な写真の保存の重要性についても十分認識していただけたと思う。

そして8月5日、8日に開催した講演会ではそれぞれ100名前後の聴講者があった。

8月5日の「ヒロシマからの出発」(講師：橋爪文)では、原爆体験者として、被爆時の強い衝撃による被災状況や言葉にするのも辛い苦しみやその後の闘病から立ち上がって体験談を語り続けて核廃絶、平和の尊さを世界に向け発信していることなどをお話しされた。

また8月8日の「記録の重み・被爆直後を撮影したフィルムの保存を」(講師：田良島哲・金子隆一)では撮影原板の保存の必要性と文化遺産としての価値を専門的立場から語られる等有意義なセミナーとなった。

池田 雄二(事務局長)

### 8.1.3. 見学会

#### [見学会概要]

- ・ 見学会名：「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾 被爆から70年」展及び「日本写真保存センター」見学会
- ・ 日 時： 2015年8月22日(土)14:30～17:00
- ・ 会 場： 日本写真保存センター設立準備室、JCIIフォトサロン
- ・ 共 催： アート・ドキュメンテーション学会
- ・ 概 要： アート・ドキュメンテーション学会(以下JADSとする)と共催で、「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾 被爆から70年」展と日本写真保存センターの見学会および講演会を行った。JADSは、「図書館・美術館・博物館、美術研究機関、関連メディア、及びこれらに関係あるものの連絡・連携のもとに、わが国、さらには国際間における、アート・ドキュメンテーションをめぐる諸問題の解決と進展に寄与すること」を目的とする学会で、デジタルアーカイブ、アート・アー

カイブに関心がある研究者、美術館・博物館関係者が多く所属している。当日はJADS会員を中心に写真家やドキュメンテーション業務に携わる専門家、研究者、29名が参加した。

[講演]

「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾 被爆から70年、写真記録の重み」

講 師：松本徳彦(公益社団法人 日本写真家協会副会長)

写真展企画の意図と、展示した写真について以下のように説明を行った。

本写真展では、被爆70年を機に、広島、長崎の被爆から3ヶ月以内の惨状を捉えた写真68点を展示している。展示ではネガの劣化も含め事実をできる限り歪曲せずに伝えることを目指した。中には目を覆いたくなるような凄惨な画像もあるがこれらの写真は、他の記録媒体ではなし得ない直接的な記録である。被爆体験者の多くが世を去り、実相を語り継がれることが少なくなってきた昨今、悲劇を再び繰り返さないよう、ぜひ目をそらさずにご覧いただきたいと考えている。

「日本写真保存センターの活動—写真フィルムの保存とデータベース化について」

講 師：中川裕美(日本写真保存センター調査主任)

写真原板の特徴と、保存センターで行っている写真原板の保存方法と、データベース化の方法について以下のように紹介を行った。

写真原板は、撮影した時に直接事象を記録した、第一義的な記録資料である。例えば、今回展示をした写真の山端庸介のネガフィルムを精密に見ると、撮影順や山端の撮影意図が読み取れる。写真原板はプリントにはない情報を豊富に持つ重要な資料であるが、現在は、劣化・散逸の危機に瀕している。

日本写真保存センターでは、こういった貴重な「写真原板」を保存し、後世へ伝える活動をしている。センターの調査活動は(1)物理的劣化防止・保存と(2)デジタルデータベース化の2つに大別できる。センターではデータベースの基本単位をネガホルダー1本分として、写真家、ネガホルダー、画像コマの3段階に分け、IDを与えている。将来はメタデータ項目の標準化を行い、写真原板情報を集めるセンターとなることをめざしている。

[質疑応答]

講演後は以下のような活発な質疑応答が行われた。

[問] 劣化ネガに癒着物があった場合は有機溶剤を使うか。

[答] 写真原板を傷めるおそれがあるため溶剤は使用せず、軽くぬぐう程度に留めている。

[問] ミュンヘン美術史中央研究所など、ヨーロッパには写真アーカイブを既に持っている研究機関が多い。日本写真保存センターではヨーロッパの写真アーカイブの保存方法や検索項目を参考にしているか。

[答] 保存については温湿度や住環境の違いから、ヨーロッパで標準的とされるアーカイバル製品は日本では必ずしも完璧ではない。むしろ虫干しや風を通す、という日本古来の保存対策が写真ネガにおいても有効である。検索方法については、フランス、イギリス、アメリカの写真収蔵機関のキーワードは参考にしている。

[問] 映画フィルムの保存とアーカイブ化については参考にしているか。

[答] フィルムベースの劣化など、写真と映画では共有する問題も多いので適宜参照している。

[日本写真保存センター見学]

展示見学・講演の後は、JCIIビル4階の日本写真保存センター設立準備室の見学会を行い、ネガの包材、スキヤニング方法などを参加者にご見学いただいた。

[まとめ]

今回の見学会の参加者は、美術館・博物館、大学研究室、企業資料館など(東京国立博物館、国会図書館、慶応大学他)の現場でネガの保存を行っている実務者の方が多く、現場のご経験に基づくご意見も多数いただいた。質疑応答、見学会では活発なご質問、ご意見をいただき、共同研究のお申し出もあった。

従来、一次資料とは考えられていなかったため、資料としての位置づけが曖昧なまま収蔵されていた「写真原板」の保存とアーカイブ化の手法が、専門的な研究者、写真原板収蔵館からも強く求められていることを実感した。

中川 裕美(調査員)

#### 8.1.4. page2016

[セミナー概要]

- ・ セミナー名: page2016 オープンイベント 日本写真保存センターセミナー  
「写真原板のデジタルアーカイブの現在」
- ・ 日 時: 2016年2月3日(水) 13:30 ~ 16:30
- ・ 開催場所: 池袋サンシャイン文化会館7階710会議室
- ・ セミナー内容: 大量に遺されたフィルム画像を利活用するには、デジタルに変換した画像を保存・蓄積することが重要である。「日本写真保存センター」が構築している写真原板のデータベースはどのようなものか、画像閲覧の仕組みと現状について解説した。また、収蔵されている写真原板の数量に応じて、どのようなシステムの構築がふさわしいかを提案し、個人写真家から中規模程度の美術館や資料館などが収蔵しているフィルムを閲覧できる実情にあったシステムを説明した。

[内容]

「写真原板のデータベース」

講 師: 笛木 諭(日本写真保存センター 副主任)

当センターが構築している写真原板のデータベースについてシステムの詳細構成と機能、管理項目や検索について説明した。

「データベース SAI-CHIについて」

講 師: 奥平 正幸(凸版印刷株式会社 トッパンアイデアセンター 関西TIC本部ICTソリューション部 課長)

当センターが採用したデータベースSAI-CHIの特長、写真原板のデータベースに相応しい理由やシステムの構成について説明した。

「データベース構築に関するノウハウ」

講 師: 大塚 健太(キヤノンシステムアンドサポート株式会社 東京営業本部中央営業部中央サポート課)

システムの基本構成、ネットワーク構成と必要なセキュリティ対策、及び推奨するデータバックアップ方法などを説明した。

「写真原板データベースのデモ」

講 師： 笛木 諭(日本写真保存センター 副主任)

システムのデモンストレーション及び解説をした。

#### [セミナーまとめ]

page開催時期に行う当セミナーも4回目となった。今回のセミナーは当センターがこれまで進めてきた写真原板のアーカイブシステムが完成したこともあり、その紹介も兼ねて写真原板のデジタルアーカイブについて当センター、凸版印刷(株)、キヤノンシステムアンドサポート(株)の3者のプレゼンおよび当センターの写真原板データベースのデモを行った。

セミナーの事前準備、会場の設営、撤収等については、これまでの経験、ノウハウを生かしてスムーズに行うことが出来た。また今回の来場者数は90名となり、昨年と比べ多少少なくなったものの、会場のレイアウト原状を変更することなく保存センター紹介コーナーも開設でき、かつ空席も目立たない適度の空間が確保できたので、90-100名程度を目途に今後計画したほうが良いと考える。

講演の後、Q&Aセッションを設けたところ、フィルムは水洗いなどの再処理を行った後に保存しているのか？ スキャンの解像度は？ ファイルフォーマット方式は？ 肖像権対応は？ 等々の質問が出てきて活発なQ&Aとなった。

#### [聴講者アンケート結果]

聴講者に対するアンケートを実施したので、その結果を報告する。

##### ○ 聴講者(署名簿)の内訳

合計人数70名

|    |         |           |
|----|---------|-----------|
| 内訳 | JPS・写真家 | 17名 (24%) |
|    | 写真団体・個人 | 5名 (7%)   |
|    | 公的機関・大学 | 9名 (13%)  |
|    | 放送・新聞   | 7名 (10%)  |
|    | 印刷・出版   | 11名 (16%) |
|    | その他企業   | 10名 (14%) |
|    | 未記入     | 11名 (16%) |

昨年のセミナーとは、セミナー内容が異なるので、単純な聴講者の区分け比較をしても意味がないが、共通点、異なる点について記述する。

- ① 前回同様JPSを含めた写真家の比率が高い。(前回19%、今回24%)
- ② 今回、放送・新聞、印刷・出版社の比率が高い。(前回12%、今回26%)
- ③ 公的機関・大学の比率は変化なし。(前回11%、今回13%)

##### ○ アンケート分析

アンケートの集計結果(有効回答数43名)の詳細は割愛する。

ここではアンケートで特徴的な部分について記述する。

- ① 住所… 東京・神奈川の1都1県で75%を占める。遠方では北海道から1名参加していた。
- ② 相談希望件数… 18件(42%)あり。内容については後日個別に確認していくが、聴講者は、悩みや課題

を抱えており、セミナーで解決できればという思いがあるのではないかと感じる。

③ セミナーの情報入手元 … JPSからの案内(メール、郵便物)、知人からの紹介の二つで約80%を占める。

④ 参加目的 … 所属先のデジタルアーカイブのため(40%)、自分あるいは家族のデジタルアーカイブのため(26%)、研究(19%)となっている。

目的がはっきりした参加者が多く、またアーカイブについて取り組もうとしていることがわかる。

⑤ セミナー評価 … よかった(51%)、ふつう(30%)、満足できなかった(2%)、未回答(16%)という結果。未回答分を満足できなかったと理解すると不満足が約20%になる。

なお、満足できなかった理由としては、「写真家向けではなかった」とある。

⑥ 写真原板のアーカイブ化は行っているか … 行っている(44%)、行っていない(33%)、未回答(10%)

約半数が何らかの方法でアーカイブを行っていることがわかる。

⑦ アーカイブで困っていること … 未整理(36%)、データのバックアップ(33%)、システムの構築(27%)となっている。どうアーカイブ化すればよいのか、あるいはどう適正に運用せればいいのか悩んでいるように思える。

⑧ 今後の対応 … システムの構築(45%)、専門家に相談(15%)の二つで50%を超える。

積極的な姿勢がうかがえる。

⑨ 原板を保存センターに寄贈したい … 5件あり。今後精査していく。

⑩ 保存センターへの要望・企画依頼 … 8件あり。今後精査していく。

池田 雄二(事務局長)

## 8.2. トピック

平成27年度の情報発信活動の中で特に画期的なことは写真原板の利活用が増えたこと、写真原板以外の利活用もあったことが挙げられる。日本写真保存センターが収集してきた写真原板を含めた資料情報群の利用価値があることの根拠の一例として意義があった。そのほか、2015年は戦後70年の節目であり、それをキーワードに展示と利活用が見受けられた。また、本年度はウェブサイトの更新も行い今後の情報発信の展開にも備えた。本年度は8.1.で述べた他に以下の展示も行った。

2015年11月7日、有楽町朝日ホールで開かれた第9回フォトフォーラム「地球を語る!」でパネル展示した。内容は、日本写真保存センターの活動内容を簡単にまとめたものと収集した写真原板を数点展示した。

2016年2月25日から28日まで、みなとみらいギャラリーでCP+2016特別展示「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」を開催した。ギャラリーAでは、8月に行った内容の巡回展を行った。また、ギャラリーCでは、11月に行った内容を拡充して調査風景と収集した作品(コンタクトプリント含める)をプリントアウトしたものを約60点展示した。来場者は約5,000人。

### 8.2.1. 利活用

今年度は、写真原板の使用と作家調査を含めて4件の利活用があった。詳細は以下の通り。

利用原板：朝倉 隆氏撮影原板2点；夫婦と砲弾、傷痕軍人デモ

利用内容：第21回「公害・環境、健康、まちづくりフェスタ」

日 時：2015年5月24日

場 所：ペDESTリアンデッキ 武蔵溝ノ口

利 用 先：「公害・環境、健康、まちづくりフェスタ」川崎公害病患者と家族の会

利用原板：山端 庸介氏撮影原板1点；臨時救護所で背中の火傷にチンク油を塗って手当をする看護婦と医師

利用内容：赤十字NEWS

日 時：2015年8月1日(発行)

利 用 先：日本赤十字社企画広報室

利用原板：浅野 隆氏資料(撮影原板および付随資料)

利用内容：浅野 隆氏撮影原板の研究調査

日 時：2016年1月8日

場 所：日本写真保存センター設立準備室内

利 用 先：東京大空襲・戦災資料センター

利用原板：吉岡 専造氏撮影原板1点；吉田 茂 庭にて 昭和36年5月

利用内容：「PEOPLE WHO SHAPED THE TIMES 朝日新聞出版写真部の70年」

日 時：2016年3月10日～3月16日(銀座) 2016年3月31日～4月6日(梅田)

2016年4月28日～5月18日(名古屋)

場 所：キャノンギャラリー銀座、梅田、名古屋

利 用 先：朝日新聞出版

## 8.2.2. ウェブサイトの変更

ウェブサイトは広報や情報発信の手段として強力である。日本写真保存センターでもウェブサイトを利用している。しかし、諸般の事情から情報発信の機能が弱くなっていた。

そこでウェブサイトでも柔軟かつ速やかに適切な情報を発信するために内容の拡充・整理を行い、「日本写真保存センター」のウェブサイトを一新したので報告する。

### [変更の理由]

今までのウェブサイトは最新情報の発信源として利用したいのに休止状態にあった。その理由は、ウェブサイトの更新と保守運営には専門の知識を要し、その素養のある調査員が抜けてしまった後の対応がうまくできなかったからである。

変更前のウェブサイトはコンテンツ面と技術面で問題を抱えていた。具体例を挙げると、コンテンツ面では、各ページに文章を制作したため内容の重複が起き、内容がくどく情報がうまく伝えにくかった。かつ、日本写真保存センターの活動紹介の項目は更新されていないため内容が不十分になっていた。また、技術面では、ウェブサイトの運営にはHTMLやCSSなど専門の知識を必要とするため、今まで管理保守と更新が止まっていた。さらに、変更前のセキュリティの状況は上記の通り管理保守が止まっていたのでリスクが高い状態にあった。

### [変更後の特長と問題の解決]

ウェブサイトの運用を自分たちで行うことを第一としたため、新しいウェブサイトではWordPress<sup>\*1</sup>というCMS<sup>\*2</sup>を利用することにした。

このCMSを利用することにより、従来一人の仕事になっていた記事作成・更新と保守管理を分けることで人的問題の緩和を図った。コンテンツ面では記事作成をMicrosoft OfficeのWordを扱う感覚でできるので記事作成者がHTMLに不慣れでも更新ができるようになった。技術面では、ウェブサイトの管理(記事、メディア、ロ

グイン履歴など)をブラウザベースで一元管理でき、簡単に操作を行えるようになった。そして、GNU General Public Licenseのため公式のサポートは期待できないが、代わりとなるフォーラム(有志によるサポート)の規模が大きく活発なのでサポート面での不安要素は少ない。

CMS導入だけでは解決できなかったコンテンツ面の問題は、情報が整理されていないことがある。そこで、内容整理のためにメニューを再構築することにした。変更前の内容を日本写真保存センターの活動に即し三つの領域(収集、保存、アーカイブ)に分類して最新の情報に更新した。さらに、支援組織の紹介やボランティアの募集など支援に関する項目を今回追加し、四つの項目を基礎に構造(メニュー)を変更した。

そして、上記のメニュー構造ではセミナーの告知などをするためにはメニューの組換えをその都度しなければならず作業が複雑になってしまうので、それら最新情報にはメニューの組換えをせずに速報性の高いブログで対応することにした。

また、今までの日本写真保存センターの調査成果をまとめた資料を公開できるように、インターネット上の物はリンクを作り、報告書やニュース記事などの紙資料は電子化しダウンロードできるよう整備した。

最後に、技術面での問題にあったセキュリティは、ページの改ざんなどは更新履歴やログイン履歴などのログ確認で対応する。ただし、WordPressはマルウェアなどの攻撃の被害報告数が多く、日々新たな脆弱性が指摘されている。ユーザレベルでもアカウントのパスワードの定期変更などの対応<sup>\*3</sup>が必須である。

#### 参考ウェブサイト

※1 WordPress Codex日本語版 WordPressの機能 [http://wpdocs.osdn.jp/WordPress\\_の機能](http://wpdocs.osdn.jp/WordPress_の機能) 2016年2月29日確認

※2 株式会社NTTデータビジネスブレインズ とんがりくんCMS CMSの基礎知識  
<http://tongarikun.jp/knowledge/> 2016年2月29日確認

※3 情報処理推進機構 IPA 対策のしおり シリーズ(4) 不正アクセス対策のしおり  
[http://www.ipa.go.jp/security/antivirus/documents/04\\_fusei.pdf](http://www.ipa.go.jp/security/antivirus/documents/04_fusei.pdf) 2016年2月29日確認

### 8.2.3. その他

8月に行った原爆展は関連した報道が多くあった。以下に代表的なものを報告する。

#### A ウェブサイト

##### A-1 Stars and Stripes (和名:星条旗新聞)

日 時:2015年8月5日(公開)

URL:<http://www.stripes.com/news/special-reports/world-war-ii-the-final-chapter/features/the-rarely-seen-images-of-death-and-damage-that-survived-hiroshima-1.360858>  
(2015年8月24日確認)

##### A-2 NHK「かぶん」ブログ

日 時:2015年5月12日

URL:<http://www9.nhk.or.jp/kabun-blog/700/216523.html> (2016年3月18日確認)

#### B 新聞・紙媒体

##### B-1 読売新聞

日 時:2015年5月11日

タイトル:「原爆語る写真の傷」

B-3 朝日新聞

日 時：2015年8月5日

タイトル：「レンズが捉えた広島・長崎 投下直後の写真、東京で展示」

B-5 日曜版『しんぶん赤旗』

日 時：2015年8月16日

タイトル：「被爆ありのまま見てほしい 日本写真家協会が写真展」

大関 直樹(調査員)

## 9. 支援組織

「日本写真保存センター」の支援組織が設立されたのは、2年前の2014年5月である。公益社団法人日本写真家協会の賛助会員を対象に、2014年5月8日に支援組織会員説明会を開催し、支援組織の趣旨に賛同していただいた12社が初年度の支援組織会員となられた。2年目となる今年度は、その12社に加え2社増え合計14社となった。

この章では、「日本写真保存センター」の活動と支援組織の関わり、支援組織の内容等について述べる。

### 9.1. 支援組織の必要性

「日本写真保存センター」のミッションは、一言でいうと日本文化・歴史を色濃く記録した写真原板の調査、収集、保存、アーカイブ化と活用である。

現在の「日本写真保存センター」の源流は平成13年「日本写真家協会」内に設立基金を設けたことに始まるが、ミッションの具体的な活動としては、平成19年度以降から「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」、平成23年度以降はさらに発展させ「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」といった一連の調査研究を文化庁から受託したことである。

年々「日本写真保存センター」の活動は、写真原板の保存研究や著名写真家の原板収集、アーカイブと活用の研究等々の領域で充実してきており、このモメンタムを維持向上させ、さらに発展させ将来に向けて展開していくためには、

- ① 保存活動の重要性の理解と協力
- ② 事業運営に必要な要員・資金の安定的確保

が最も重要なこととなる。

このふたつの事項については昨年度の報告書に述べたとおりであるが、普遍的な事項であり、この間の変化も含めあらためて報告する。

### 9.2. 保存活動の重要性の理解と協力

先に述べたように我々「日本写真保存センター」のミッションは、写真原板の調査、収集、保存、アーカイブ化とその活用であることは言うまでもない。

特にフィルムベースの写真原板はビネガーシンドロームといわれる高温多湿によるフィルムベースの加水分解で、フィルムに残された画像が破壊され、貴重な記録がなくなってしまうことが多く発生しているため調査、収集、保存の作業を加速する必要がある。

文化庁の委託を受けることにより、この作業が順調に進めることが出来ているものの、「日本写真保存センター」自らがこれまで収集した写真原板の本数は20万本程度であり、広く日本国内に存在する収集すべき本数から見れば微々たるものであることは否めない。この問題の対応としては、一つに今後も継続して写真原板収集に注力し、更に収集本数を増やしていくよう進めていくことである。

二つ目は写真原板の保存に関する情報発信、啓蒙活動の強化である。

これは保存センター自身の写真原板収集活動には物理的な限度があり、飛躍的に伸ばしていく可能性は低いと言わざるを得ない状況の中で、より前向きな保存活動の対応として、写真原板の保存と活用に関する問題提起と啓蒙活動をより充実することである。

「日本写真保存センター」の調査、収集、保存、アーカイブ化の活動を積極的に紹介し、またこの保存活動を通じて我が国の歴史的文化的価値のある写真原板が保存され、保存されることによってこれらの画像が将来に渡って活用することが出来る環境が整いつつあることを認識していただくことが、より前向きな保存活動につながっていくものと考ええる。

上述したような我々の保存活動、情報発信、保存啓蒙活動は自ら行うとともに同じ価値観を共有する仲間を通じて積極的に活動していくことが重要である。

「日本写真保存センター」の事業活動の遂行には、支援組織会員の協力支援が不可欠であり今後も会員の獲得を継続して行っていく。

支援組織の会員は、写真文化にかかわる企業・団体であり、「日本写真保存センター」とともに写真原板保存の重要性の理解と協力を求めて活動している。

### 9.3. 事業運営に必要な要員・資金の確保

「日本写真保存センター」の活動拠点は千代田区一番町にあるJCIIビル内にあり、写真原板の調査から保存、アーカイブ化の一連の作業は資料調査員やアルバイトの総計6名で行っている。当然ながら一般企業・団体と同じようにオフィス賃貸料、光熱費、人件費、IT機器代、包材等々の費用が発生する。その費用は事業活動が拡大するにつれ、その費用も膨らんでいくし、また保存事業の継続した活動が必要であり、結果として費用も継続して発生することになる。

一方、「日本写真保存センター」の活動は、文化庁の委嘱事業であり、年度ごとに入札を経て契約により業務を請け負っている。

現在保存センターに必要な事業費の大半は文化庁から出ているものの、「日本写真保存センター」の活動が拡充するにつれ、要員不足、資金不足が拡大している。

更に1年ごとの契約なので、来年度に必要な事業費が確保できているわけでもない。

このような問題を抱えながら、将来に渡って継続して行っていくためには、自助努力が必要であるし、その必要性が年々増している。

そこで「日本写真保存センター」では、その対応として2年前から支援組織を設立し、その支援組織から事業運営に必要な資金と要員の補てんを受けている。具体的には支援組織から保存センター業務常勤管理者1名の派遣と、物品の購入やアルバイト人件費などの必要経費の一部を支援組織の会費という形で資金援助を受けている。

今後については、更に支援組織会員数を増やし、活動の輪を広げるとともに、資金的にも増やしていきたいと考えている。また支援という広い枠では、支援組織のみならず、ボランティア要員の確保や一般団体、個人からの寄付も積極的に募っていきたい。

次に「日本写真保存センター」支援組織会員の募集要項及び会員について記述する。

### 9.4. 支援組織会員の募集要項

#### 9.4.1. 支援組織の目的及び概要

「日本写真保存センター」が行っている歴史的、文化的な写真原板の調査、収集、保存、アーカイブ化活動や保存の必要性の啓蒙活動を加速させるために支援組織を設立する。「日本写真保存センター」はその活動に必要な要員派遣を支援会員会社に依頼することが出来る。また「日本写真保存センター」の経費の一部を補てんするために支援組織から会費を徴収する。

要 員：キヤノン、ニコン、富士フィルムの3社のうち1社から1名を派遣する。

任期は2年。現在はキヤノンから要員1名を派遣中。

会 費：1口20万円2口以上/年(4月から翌年3月までの年会費)

会 議：2回/年

#### 9.4.2. 支援組織会員(平成28年1月時点 14社・団体)

株式会社アイデム

エプソン販売株式会社

オリンパス株式会社

株式会社キタムラ

キヤノン株式会社

株式会社シグマ

株式会社写真弘社

株式会社タムロン

凸版印刷株式会社

株式会社ニコン

富士フィルムイメージングシステムズ株式会社

株式会社フレームマン

光村印刷株式会社

一般社団法人日本写真著作権協会

池田 雄二(事務局長)

## 10. まとめ

### 原爆被害の実像を展示した写真の反響

原爆投下から70年の8月4日から30日まで、公益社団法人日本写真家協会「日本写真保存センター」が催した「知っていますか…ヒロシマ・ナガサキの原子爆弾」展は24日間で、8,000人を超える入場者があった。来場者の多くがテレビや新聞記事を見てこられた、写真とは無縁の人たちが大半を占めていた。多くの人が詰め掛けにしている、実にシーンと静まり返った会場を肅々と、展示された写真とキャプションを読み比べながら歩む姿は、通常の写真展とは違った緊張感があった。

何故か、これまでほとんどの人が「原爆写真」を見る機会が無かったためか、被害の惨たらしさ、凄惨さに声を失ったからか、被爆の実情を精緻な描写をした写真を見ての驚きがひしひしと伝わってきた。写真が持つ迫真の力が端的に発揮された瞬間のようなものを感じた。

写真展は被爆直後を撮影したヒロシマの松重美人、深田敏夫、岸田貢宜、尾糠政美、川原四儀と、ナガサキの山端庸介氏(一昨年収集済み)らの写真原板(一部コピーネガ含む)すなわちオリジナルネガから直接プリントした写真で構成している。

このことは写真保存センターが収集する原板がオリジナルのフィルムであることを証明するものであるからである。そのためプリントはシャープでしかも高いグラデーションの画像が美しく精緻であったからである。

取材はNHKをはじめ新聞各紙がこぞって掲載し、来場者を支援いただいた。驚いたことは、アメリカ軍の機関紙Stars and Stripesが取材し、紙面とウェブサイトで原爆問題を世界に向けて発信したことである。

### 渡辺義雄、木村伊兵衛氏の原板の取得

写真界で初の文化功労者となられた写真家の渡辺氏の全原板(約4万点)が遺族から寄贈されたことである。代表作の「伊勢神宮」から「奈良大和の古寺大観」「迎賓館」「新宮殿」「出雲大社」などと「旧帝国ホテル」の建築写真。戦後いち早く海外(イタリア、ロシア・モスクワなど)で取材したモノクロ原板も、氏の創作活動を知る上で重要な作品群である。

小型カメラの名手と呼ばれた木村伊兵衛の舞台写真「前進座」のフィルムを寄託いただいたことで、順次、木村芸術の神髄と言われる「東京の下町」や「秋田」、「人物写真」群を取得する日が近づいている。

### アーカイブの構築に向けて

写真原板の収集活動は日増しに増えている。と同時に、写真原板から得られる画像情報のデジタル化も進んでいる。写真原板は収集・保存するだけでなく利活用できるように整理しておく必要がある。それにはデジタル化は避けて通れない。ただデジタル化はそう簡単でないことも判った。とくに高精細な画像情報を得るためには、高性能のスキャニング機器を必要とする。1台数百万円もする。それを処理するPCから画像を保存する機材まで購入するとなると大変である。文化庁の予算では到底無理である。賛助いただける企業を増やすことも限度がある。

アーカイブの構築には民間だけでなく、国の力を貸していただけないと苦しい。日本全国の文化資産を保持している組織が共同して運営する機関を設け、統合された大きなアーカイブを構築することも検討されてよい。資金面、人材面、運用面などで利点は多々ある。夢でなく実用面からの提言である。

文化庁主催のシンポジウム「文化資料アーカイブ入門 ～将来の芸術文化の発展に向けて～」が、平成28年3月24日、港区港南のкокヨホールで催された。

基調講演は日本写真保存センターの諮問調査委員でもある田島良哲(東京国立博物館博物館情報課課長)が行い、保存センターからは中川裕美が事例報告として、当センターの活動状況を報告した。「なぜ写真原板のアー

カイク化が必要か」「写真原板をめぐる現状」「写真原板の収集・保存・アーカイブ化の方法」について、これまで行ってきた調査や収集・保存と劣化対策のノウハウや事例を、写真を用いて講演を行った。

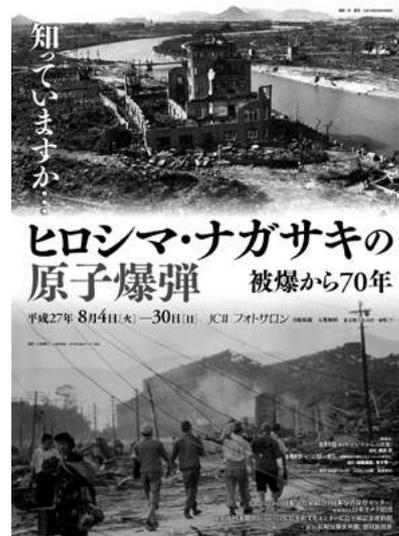
当センターではこれまでも収集した写真を使って、写真フィルムの劣化や保存の現状をJPSの会報や日本印刷技術協会のpageセミナーで公開してきた。また今年度の事業として催した「原爆展」などで、保存センターの意義が認知されるようになり、歴史的・文化的なフィルムの収集と劣化対策についての問い合わせが増えている。

その甲斐あってか、フィルムの保存についての関心が高まり、種々の情報が集まるようになり感謝している。一方、作業量の増大で調査員の確保、経費負担が過大となって四苦八苦している。欧米並みとは言えないが、国がもっと文化行政に予算を付けて、文化国家としての体面を堅持してほしいものである。

松本 徳彦(公益社団法人 日本写真家協会副会長)



原爆展 図録



原爆展 ポスター



山端庸介 道ノ尾駅前 1945.8.10



山端庸介 岩川町 1945.8.10



菊池俊吉 広島赤十字病院 1945.10



原爆展 会場風景 2015.8



木村伊兵衛 『前進座』 1966年



木村伊兵衛 『前進座』 1966年



岡村崙 マニフィカトの聖母(部分)



岡村崙 聖フランチェスコ聖堂



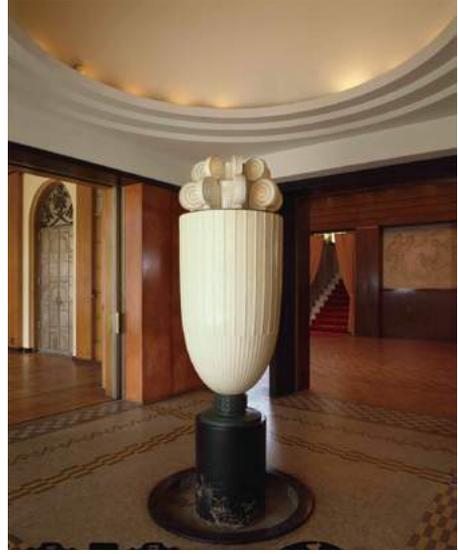
渡辺義雄 『新宮殿』 1969年



渡辺義雄 『迎賓館』 1975年



増田彰久 『旧朝香宮邸』外観 1984年



増田彰久 『旧朝香宮邸』内観 1984年



佐伯義勝 料理写真



佐伯義勝 料理写真



菅井日人 『ザビエルの旅』 1991年



菅井日人 『ザビエルの旅』 1991年



渡辺義雄 ダビデ像 フィレンツェ 1956年



渡辺義雄 伊勢神宮 内宮正殿北 1953年



緑川洋一 15人の小学校 1955年



吉岡専造 『人間零才』 1960年



page2016 発表風景 2016.2



page2016 発表風景 2016.2

禁無断転載

平成27年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」  
報告書

平成28年3月 公益社団法人日本写真家協会

〒102-0082 東京都千代田区一番町25 JCIビル

TEL : 03-3265-7451 FAX : 03-3265-7460

<http://www.jps.gr.jp>

E-mail : [info@jps.gr.jp](mailto:info@jps.gr.jp)